茨城県行方郡麻生町

四部切遺跡

発掘調査報告書

1997年12月

麻生町教育委員会

序　　文

麻生町は、水と緑の豊かな美しい環境に恵まれ、私達の先人の残した貴重な遺産が多数存在しており、これらの知恵や教訓を後世に伝えることが私達に課せられた責務といえます。

本町では、文化財保護審議委員会の方々に遺跡パトロールをしていただき、文化財の保全に努めております。

このたび、土採取工事中に貝塚を発見しましたが、工事を続けたいとの希望により、発掘調査をして記録保存することになりました。

調査を実施するにあたり、関係機関各位にはご指導、ご協力を賜わり感謝申し上げます。

この調査の成果である本報告書が、郷土の歴史を深めるとともに研究資料として広く活用されることを期待します。

平成９年12月

四部切遺跡発掘調査会
会長　橋本豊榮

例　　言

1. 本報告書は，茨城県行方郡麻生町麻生字四部切3125番地５の発掘調査報告書である。

1. 本遺跡の調査は，土砂採集に先行する埋蔵文化財の調査である。

1. 本遺跡の現地調査は，平成９年５月26日～６月５日まで行ない整理作業は平成９年６月10日～11月４日まで行なった。

1. 本遺跡の現地調査は，鹿行文化研究所の汀安衛が担当し，整理作業は，前田京子が図面作成をし戸島和子が実測・トレース，佐々木トミ子が版組み・拓本。遺物復元を新関豊子が行ない，貝分類，貝水洗いを横田泰隆・山本茜がそれぞれ行ない，汀が写真・執筆及び総括して行なった。

1. 本報告書の縮尺は，遺構に関しては1／20を基準とし，遺物は1／30が基準である。
水糸レベルは統一表示を基準としたが，不可能な場合はその図中に表示した。

1. 本調査の組織は次のとおりである。

職　名	氏　名	所　属
会　長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺田　弘	文化財保護審議会会長
理　事	羽生幸三	文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	羽生　均	〃
〃	平輪一郎	文化財保護審議会専門調査員
〃	植田敏雄	文化財保護審議会専門調査員
〃	汀　安衛	調査主任
〃	野田収三	（株）野田商事代表取締役
〃	糸賀洋一	教育委員会事務局長
監　事	小田英明	（株）野田商事
〃	羽生文男	麻生町出納室長
幹　事	額賀修一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	永作賢司	〃　社会教育主事

1. 本調査にあたり次の方々に協力をうけた。記して感謝の意を表したい。
横田泰隆　根本武雄　大川善久　菅谷益尚　高須松男　清宮　久　佐々木トミ子
前田京子　戸島和子　山本　茜　新関豊子　金田美智子　内田さく　金倉美和子
福沢恵子　小瀬智倫

目　　次

序　文

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経過 …… 2

調 査 日 誌 …… 3

Ⅲ．調査の概要 …… 3

Ⅳ．遺構と遺物 …… 4

1. 住 居 跡

第１号住居跡 …… 4

第２号住居跡 …… 6

第２号住居跡 …… 8

第３号住居跡 …… 10

第４号住居跡 …… 16

Ⅴ．貝　塚

1. 土　器 …… 18

Ⅵ．貝　類

1. 層　位 …… 25

2. 貝　類 …… 25

3. 貝 製 品 …… 35

Ⅶ．総　括 …… 38

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡周辺地形及び位置図 …… 1
第 2 図　住居跡，貝塚位置図 …… 4
第 3 図　第１号住居跡実測図 …… 5
第 4 図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 6
第 5 図　第２・2′号住居跡竈実測図 …… 7
第 6 図　第２・2′号住居跡実測図 …… 8
第 7 図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 10
第 8 図　第３号住居跡竈実測図 …… 11
第 9 図　第３号住居跡実測図 …… 12
第 10 図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 13
第 11 図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 15
第 12 図　第４号住居跡出土遺物実測図 …… 16
第 13 図　第４号住居跡実測図 …… 17
第 14 図　貝塚実測図 …… 19
第 15 図　Ｂ地区出土土器拓影図 …… 21
第 16 図　Ｂ地区出土土器拓影図 …… 22
第 17 図　Ｂ地区出土土器拓影図 …… 23
第 18 図　縄文土器拓影図 …… 24
第 19 図　縄文土器拓影図 …… 25
第 20 図　主な貝遺体数量図 …… 34
第 21 図　貝刃・実測図 …… 35
第 22 図　貝刃・貝輪（破損・未製品）実測図 …… 36
第 23 図　１区出土土器・石器 …… 36
第 24 図　２区・３区出土土器 …… 37

写 真 図 版 目 次

ＰＬ－ 1　遺跡発見時の状態（上・中・下）

ＰＬ－ 2　１区～３区までの貝残在部（上・下）

ＰＬ－ 3　１区～３区の貝露呈状態（上・下）

ＰＬ－ 4　貝塚の位置（上）貝層断面（下）

ＰＬ－ 5　１号住～４号住遺構全景（上・下）

ＰＬ－ 6　４号住完掘（上）同 竈（下）

ＰＬ－ 7　４号住竈と出土遺物状態（上・下）

ＰＬ－ 8　３号住遺物出土状態（上）同完掘（下）

ＰＬ－ 9　２号住遺物出土状態（上）２号′完掘（下）

ＰＬ－ 10　１号住遺物出土状態（上）同完掘(下)

ＰＬ－ 11　Ｂ区貝層（上）同完掘，北側から（下）

ＰＬ－ 12　Ｂ区完掘，下側から（上）同上から（下）

ＰＬ－ 13　１号・２号・３号住居跡出土遺物

ＰＬ－ 14　４号住居跡出土遺物

ＰＬ－ 15　Ｂ地区出土土器（上・中・下）

ＰＬ－ 16　Ｂ地区出土土器

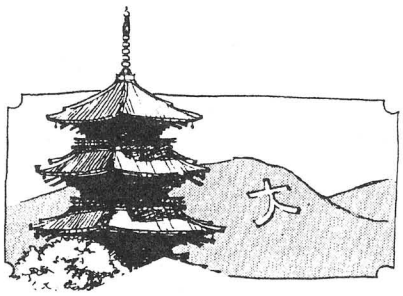
ＰＬ－ 17　住居跡出土土器

ＰＬ－ 18　住居跡出土土器・鉄器

ＰＬ－ 19　１区，２区，３区出土土器

ＰＬ－ 20　１区，２区，３区出土貝類

ＰＬ－ 21　Ｂ区出土貝類（上）同動物遺存骨（下）


六

第1図　遺跡周辺地形及び位置図

Ⅰ　遺跡の位置と環境

本遺跡は，麻生町麻生字四部切に位置し霞ヶ浦から入り込む谷津の中程に位置し南側に幅300m程の水田が広がる。谷は麻生の町並みから北側に直線的に伸びる。この谷の周辺には多くの遺

跡が存在している。本遺跡も，城下川によって解析された谷津の中程からＹ字状に分かれて200ｍ付近の標高32ｍ程の台地状に占地する。周辺には台地先端部に小屋下城（要害）1が位置し南側には小屋ノ内館2が存在している。本遺跡の南側谷津を挟んで二本木城（要害）3，大麻貝塚4。谷津を挟んで道城平遺跡5（貝塚を伴う）が所在西側には羽黒山城6（要害），遺跡北側500ｍには縄文早期のワラビ台遺跡7等が散在し自然環境に恵まれ，古代から人々の生活の場として利用されてきた。遺跡の所在する台地は標高32ｍを測り南側は水田北側は台地がカットされ旧状は把握出来ない。台地奥部のゴルフ場との境から古墳時代の住居跡が5軒検出された。その他調査のきっかけとなった貝塚が遺構前面，東側斜面に確認されたがいずれも削平撹乱を受け遺存状態は悪い。

Ⅱ　調査に至る経過

平成9年

4月21日　(株)野田商事より山砂採取中に貝塚を発見したと連絡があり，町教育委員会で現地へ行くと，貝塚と住居跡が確認された。

4月22日　現地で町教育委員会，(株)野田商事，汀安衛氏で協議した。新発見の遺跡として文化庁（県教育委員会）に報告し，協議が済むまでの間，土採取工事の中止を確認した。

4月23日　(株)野田商事に「新発見の埋蔵文化財の取り扱い」を通知した。

5月13日　町文化財保護審議会に報告し協議した。

5月19日　発掘調査会発足会議を開き，四部切遺跡発掘調査会が発足し，鹿行文化研究所，汀安衛氏を調査主任とする発掘調査団が結成された。

2　本遺跡は，前述のとおり緊急調査に近い状態での調査であった。すなわちすでに土砂採取の認可がおりており条件として遺跡が発見された場合は届けると言うものであったがかなり削平された状態で連絡があり貝塚の存在を確認した。これは前段階の県の出先機関，各事務所の担当者の資質が問われる所で有る。今回の事例はもっとも良い例で大部分は大型機械の下敷になってしまっているのが大部分で有る事は周知の事実で有る。本地形立地，周辺遺跡から最低限度確認調査を行い認可をすべきと理解する。

以下短い期間であったが調査日誌を抜粋し箇条書に述べる。

平成９年５月26日　本日より調査開始，道具類の搬入。午後調査開始，遺構確認。

５月27日　４，３号住居跡より調査開始，４軒が確認された。

５月28日　４，３号住居跡ともに遺物はすくない。古墳時代と奈良時代。

５月29日　４号遺物実測。３，２号住居跡調査，遺物すくなし。

５月30日　３，２号住居跡調査，２号は２軒になる可能性が見られる。

５月31日　３号住居跡遺物平面図作成。２，１号住居跡調査。貝塚調査開始。西，東をカットされ，この面で断面図作成。３区に分け１区から調査。

６月２日　２，１号住居跡調査，１住から金メッキの耳輪１点出土。貝塚調査。

６月３日　貝塚調査，２号住居跡遺物平面図作成。４，３，２区調査，東側からあらたな小貝塚発見，調査開始，平面図作成。

６月４日　貝塚調査，平面図作成，竈調査。

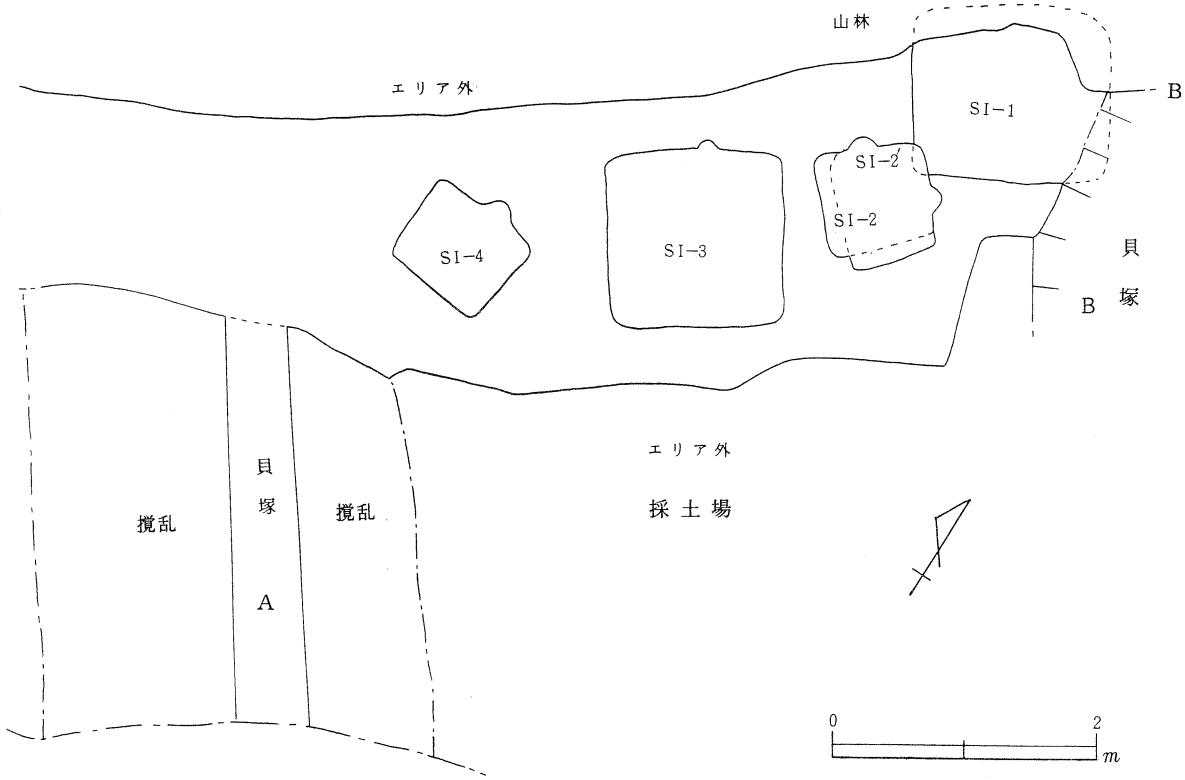
６月５日　貝塚調査，平面図作成，４時終了道具収納，簡単に打ち上げ，解散。都合10日間で現場での作業を終了した。

６月10日から貝殻の水洗いを開始した。本格的に整理作業に入ったのは８月18日以降で注記，土器観察，図面作成トレース，拓本，貝の水選別に入り 11 月 20 日整理作業を終了した。

Ⅲ　調　査　の　概　要

本遺跡は，貝殻の散布から発見されたもので遺存する部分は，僅かにこの地区のみと推察され，貝塚残存部と住居跡と思われる部分の調査を目的として作業を開始した。

遺跡大半は，すでに大部分が削平され依存部すらかなりの損傷を受け遺物が散乱していた。遺構は古墳時代後半鬼高期の住居跡３軒，奈良時代の住居跡１，平安時代の住居跡１であった。以下各住居跡の概要，遺物について述べる。



第2図　住居跡・貝塚位置図

Ⅳ　遺構と遺物

1. 住居跡

1号住居跡　（第3図，第4図）

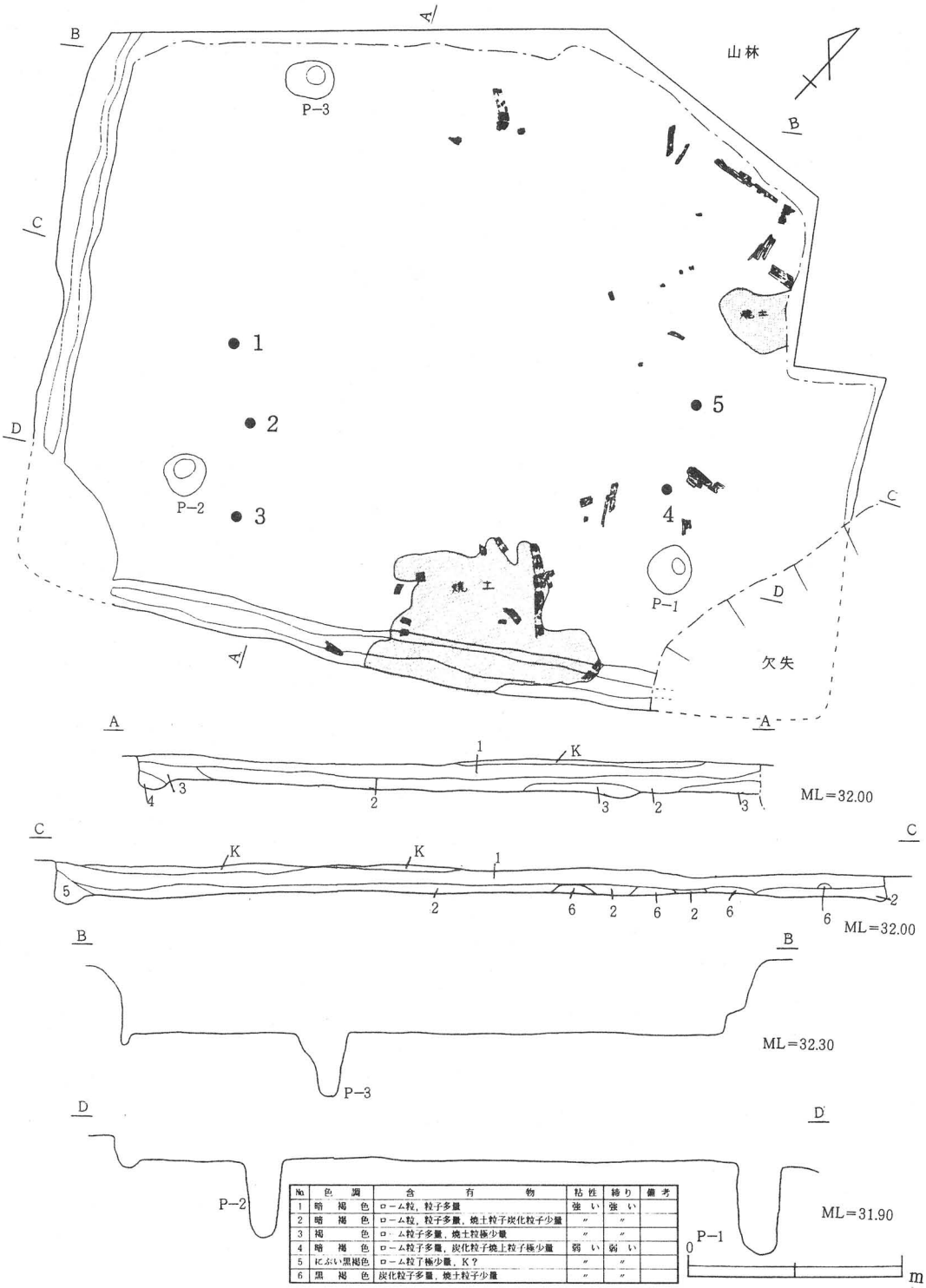
本遺構は，調査区の東側一部道路部分にかかり，また立ち木の下に入る。その他欠失した部分，は2号住居跡に堀込まれた部分が有り遺構全体を把握出来なかった。主軸をN－30°－Wに置き東西7.6 m，南北6.7 mの長方形状プランを呈する。壁面立ち上がりは20cm前後で直立，床面は相対的に中心部のみ，やや締りをもつ。他はローム剥出し状で締りは弱い。やや大型の遺構で有る。床面にはかなりの炭化物，焼土が検出された。

竈は検出されず，炉も確認出来なかった。

遺物から鬼高期の遺構と推察される。柱穴は，北東側の柱穴が確認出来ない。その他は円形で径40cm前後で円筒形掘り込みで60～90cmとかなり深い。立て替えの痕跡はない。

覆土は，西側の高い部分から自然埋積の様相を呈する。6層に分類されたる。色調は暗褐色，褐色，鈍い黒褐色，黒褐色でローム粒子，粒，焼土粒子，炭化粒子が含まれている。粘性，締りは強い。

遺物は，少なく図示出来るものは7点で1は指頭で押した感じの手捏の小型な物で粗雑な作り。2は石器制作の剥片と推察される。3は滑石製の石製品で約半分を欠失している。中央部に孔を穿

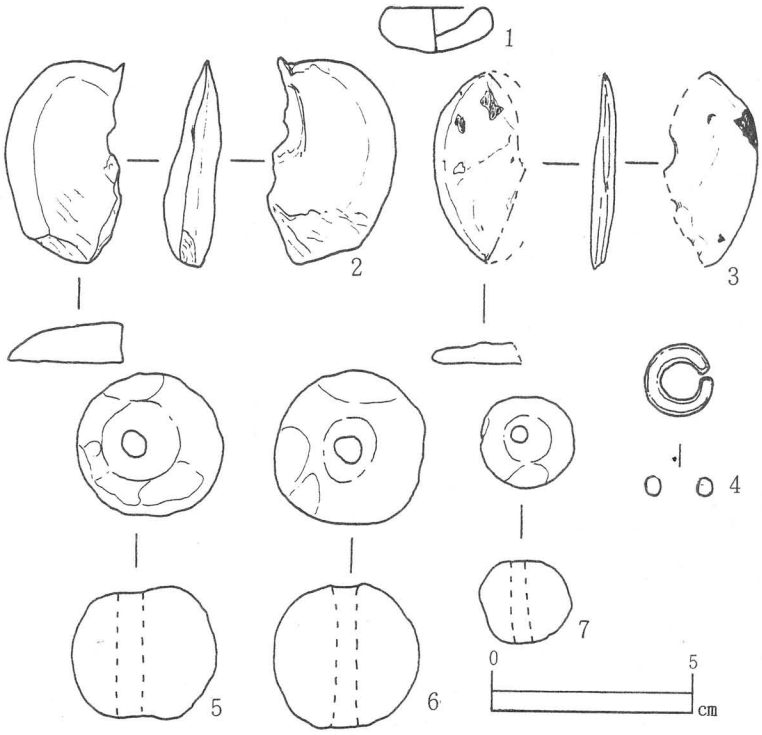


No.	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	暗褐色	ローム粒，粒子多量	強い	強い	
2	暗褐色	ローム粒，粒子多量，焼土粒子炭化粒子少量	〃	〃	
3	褐色	ローム粒子多量，焼土粒極少量	〃	〃	
4	暗褐色	ローム粒子多量，炭化粒子焼土粒子極少量	弱い	弱い	
5	にぶい黒褐色	ローム粒子極少量，K？	〃	〃	
6	黒褐色	炭化粒子多量，焼土粒子少量	〃	〃	

第3図　第1号住居跡実測図

つ，薄い。時期は，遺構とは差が有る。4は小型の耳輪で形1.8㎝，輪の径は5㎜で銅の上に金メッキが施されている。東側P1近くから出土している。その他土製丸玉が3点出土している。ほぼ円形状形態であるがやや粗雑な作り。

遺物破片，切り合い，規模，方位から鬼高期1式の所産と推察する。



第4図　第1号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(㎝)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	手捏土師器	A 2.5 B 1.1 C 0.2	粘土を指頭で押えたような状態の手捏である。底部は不整形。ほぼ完形。	指頭 ナデ	砂・礫 暗褐色 普通	完形 覆土中

石器・土製品一覧表

番号	器種	法量(㎝)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
2	石核	5.0	2.9	1.0	18	チート	覆土中	大部分利用され核に近い。
3	石製品	4.7	2.3	0.5	5	滑石	覆土中	滑石，中央部に円形の孔をわずかにとどめる。
4	耳輪	1.8	0.4	0.5	40	銅製	覆土中	金メッキ。
5	土玉	3.2	3.6	0.7	38	土製	床直	ほぼ円形状，指頭押え両端カット状
6	土玉	3.5	3.6	0.7	50	土製	床直	ほぼ円形，両端カット状
7	土玉	2.0	2.0	0.6	10	土製	床直	やや不整形，小型

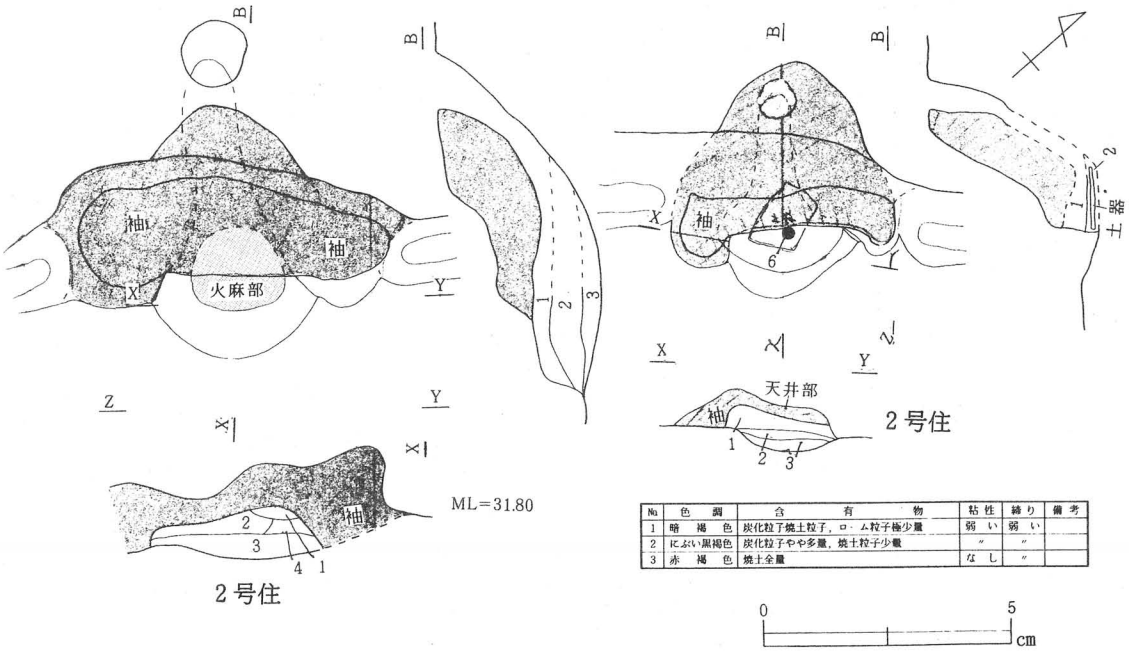
2号住居跡　（第5図，第6図，第7図）

本遺構は，2′号住居跡の大半を掘り込み東側に竈をもつ遺構で柱穴は4ケ所確認されピット3，

4は立て替えの掘り込みが見られこれらが旧2′の柱穴か？。主軸をN－40°－Wにおき東西3.5m，南北4.7mを測り長方形プランを呈する。底部はほぼ平坦，締りは良い。壁面立ち上がりは50cm程を測る。底部にはかなり多量の焼土が見られた。この焼土は，住居跡が一部埋積してからのもので空き家の状態になってからの自然埋積でやや幅の広い周溝が巡る。底部には炭化物が少量見られる。貼床。

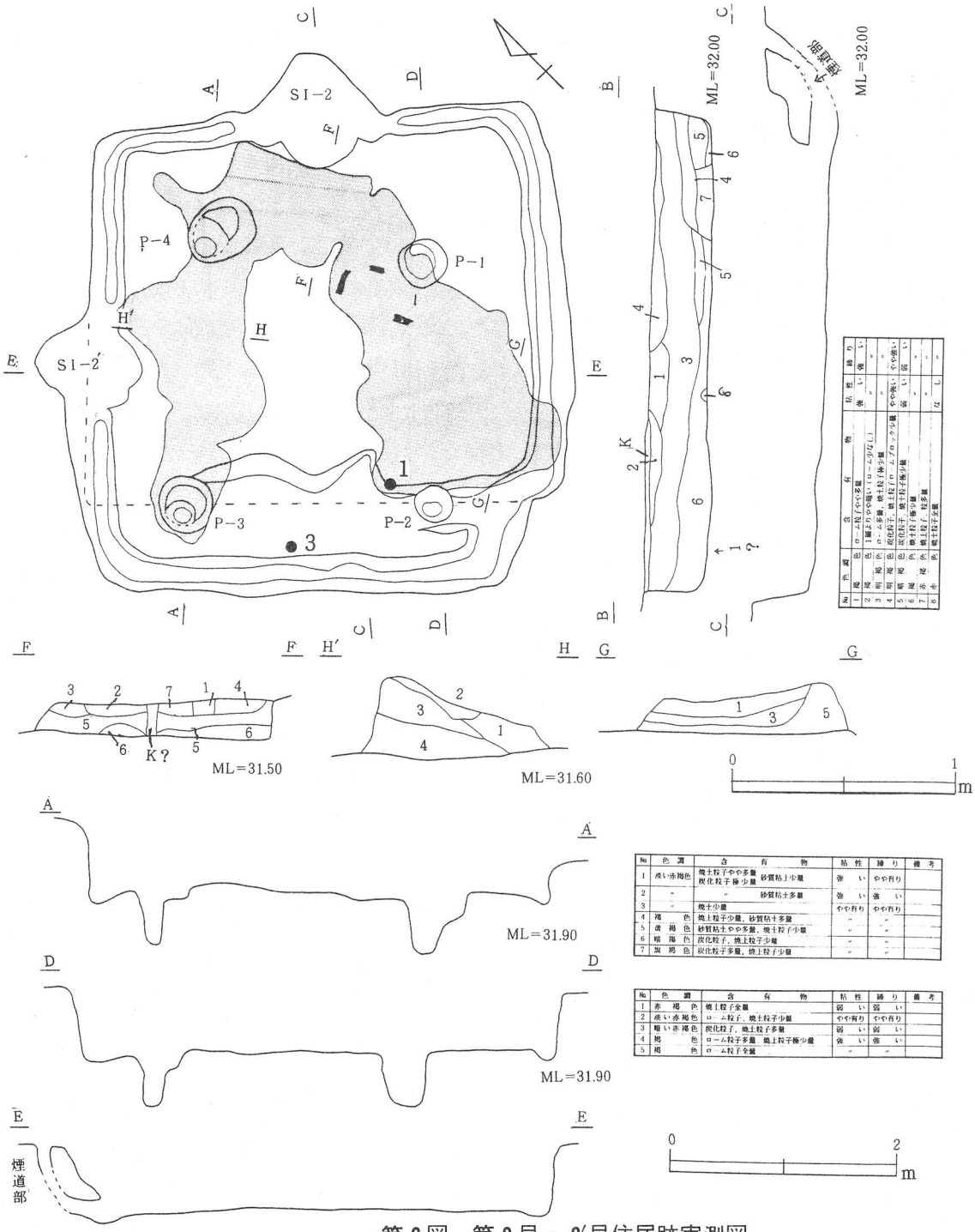
柱穴は4ケ所見られ円筒形で径50cm，深さは60cm前後。竈は，西壁面と北壁面に見られ新旧2回の立て替えが存在したと推察される。本竈は壁面にならってカットされ袖部は下部のみ残存していた。本遺構に伴う竈は北壁面に位置し存在，竈は外側に半円状に掘り込み構築し火床部から90cmに煙道部が見られる。火床部は中央部に位置し円形状形態，10cm程掘込む。北側は壁面で止め南側のみ僅かに袖が存在。砂質粘土を用いて構築している。

遺物は，少なく4は本遺構からややずれた遺物で1号住居跡の遺物の可能性が高い長頸瓶？断片でその他長頸部が少量の有る破片が見られた。1は体部が外反する坏でロクロ成形，底部はヘラナデで糸きりを消している。2，3は体部に墨書をもつ坏で書体は判読は不可能，5は須恵器蓋で天井部を欠失しており張りは不明，カエリは退化している。これらから本遺構は平安時代前半国分期の遺構で有る。



No.	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	暗褐色	炭化粒子焼土粒子，ロ・ム粒子極少量	弱い	弱い	
2	にぶい黒褐色	炭化粒子やや多量，焼土粒子少量	〃	〃	
3	赤褐色	焼土全量	なし	〃	

第5図　第2号・2号′住居跡カマド実測図



No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	赤褐色	焼土粒子やや多量 炭化粒子極少量 砂質粘土少量	強い	やや有り	
2	〃	〃 砂質粘土多量	強い	強い	
3	〃	焼土少量	やや有り	やや有り	
4	褐色	焼土粒子少量，砂質粘土多量	〃	〃	
5	濃褐色	砂質粘土やや多量，焼土粒子少量	〃	〃	
6	暗褐色	炭化粒子，焼土粒子少量	〃	〃	
7	黒褐色	炭化粒子多量，焼土粒子少量	〃	〃	

No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	赤褐色	焼土粒子全量	弱い	弱い	
2	濃い赤褐色	ローム粒子，焼土粒子少量	やや有り	やや有り	
3	暗い赤褐色	炭化粒子，焼土粒子多量	弱い	弱い	
4	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子極少量	強い	強い	
5	褐色	ローム粒子全量	〃	〃	

第6図　第2号・2′号住居跡実測図

2′号住居跡　（第5図，第6図，第7図）

本遺構は，大部分2号住居跡に堀込まれ主軸をほぼ2号住居跡と同様で竈を西壁面，東西3.6

mと小型のプランで有る。掘り込みは前者より10cm程深い。65cmをはかる。底部にはまとまった遺物はなく，僅かに竈火床部から須恵器甑が出土しているにすぎない。底部は中央に円形，周囲に半円形の三日月型の孔をもつ。前述の遺構と差程の時間差はないと推察される。柱穴は前遺構と同様のもの使用したとおもわれる。

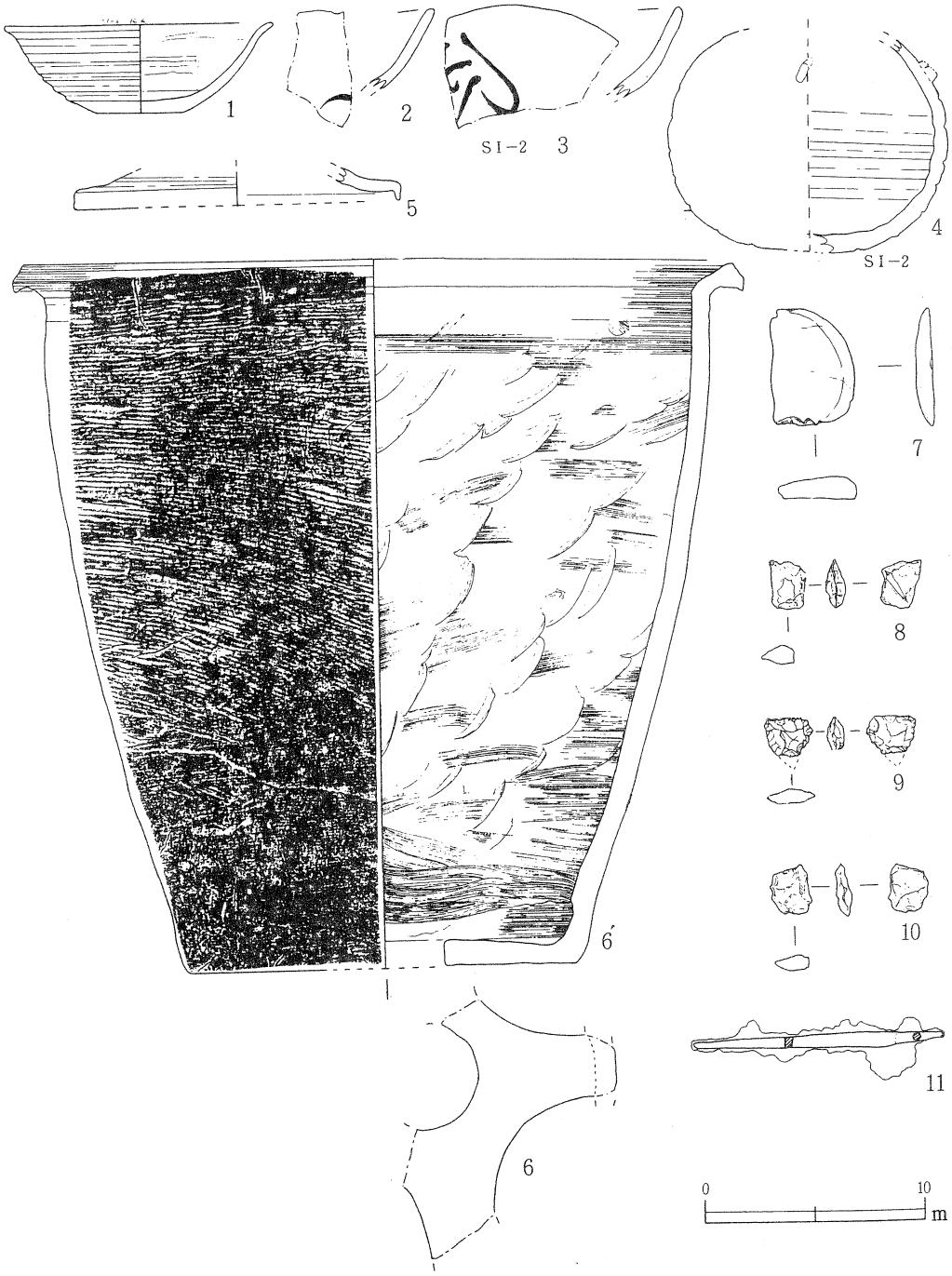
遺物は，前述の須恵器甑が出土している。その他石器剥片，石族の破片と推察されるものが出土している。また11の刺突具状鉄器が出土している。本遺構と2号住居跡との時間的な差は，遺物から観て差程ない。真間期末と国分2式，つまり奈良時代末と平安時代で有る。

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 12.2 B 4.0 C 4.0	ロクロ水挽き成形で底部ナデ調成で糸切り痕を残す。内面黒色。	ナデ ロクロ水挽き	砂石・スコリア 暗褐色 普通	カマド内 覆土中 完形
2	坏 土師器	A － B － C －	体部下位にハネ出し状の黒書あり。内面黒色で，器肉薄い。皿状に近い。	ロクロ水挽き ナデ	雲母・細石 褐色 普通	覆土中 5％
3	坏 土師器	A － B － C －	四の字状墨書あり。読方不明。接合土器なし，他2片墨書あり，内面黒色。大半欠失。	ナデ ロクロ水挽き	スコリア・雲母 褐色 普通	覆土中
4	須恵器	A － B － C －	若干つぶれ気味の器形。大半を欠失するが沈線間を縄でうめる。中央部を除く，頸部？灰袖をもつ。	回転台？ ナデ	細石 灰褐色 良	覆土中 10％
5	蓋 須恵器	A － B － C 14.8	大半を欠失し，カユリはない。端部は短く外反気味。	ロクロ水挽き	細石 青縁色 普通	覆土中
6	甑 須恵器	A B C	口唇部断面三角形,底部はコンロの孔部状で中央部に円形をもち，4ケ所の半円形状の孔部をもつ。	ナデ ケズリ	細石・雲母 灰褐色 普通	カマド内 床直 30％
6′		A － B － C －	円筒状の器形で内面に調整痕を明確に残す。粗雑な作り,口縁部は水平に近く開く。	ナデ ケズリ	細石・雲母 灰褐色 普通	カマド内 床直 30％

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
7	石核	5.3	3.8	1.0	28	緑泥岩	覆土中	明確な刃部はない。
8	石鏃	2.2	1.5	0.9	4	メノウ?	覆土中	若干の剥離面をもつ。
9	石鏃	1.7	2.2	0.6	3	チート	覆土中	先端部欠失。三角形状で細かく剥離がみられる。
10	石核	2.3	1.7	0.7	3	緑泥岩	覆土中	かなり細かく利用。
11	やり状 鉄器	11.5	0.7	0.5	13	鉄	覆土中	茎は錆化の為不明。錆化進む。



第７図　第２号住居跡出土遺物実測図

３号住居跡　（第８図，第９図，第10図，第11図）

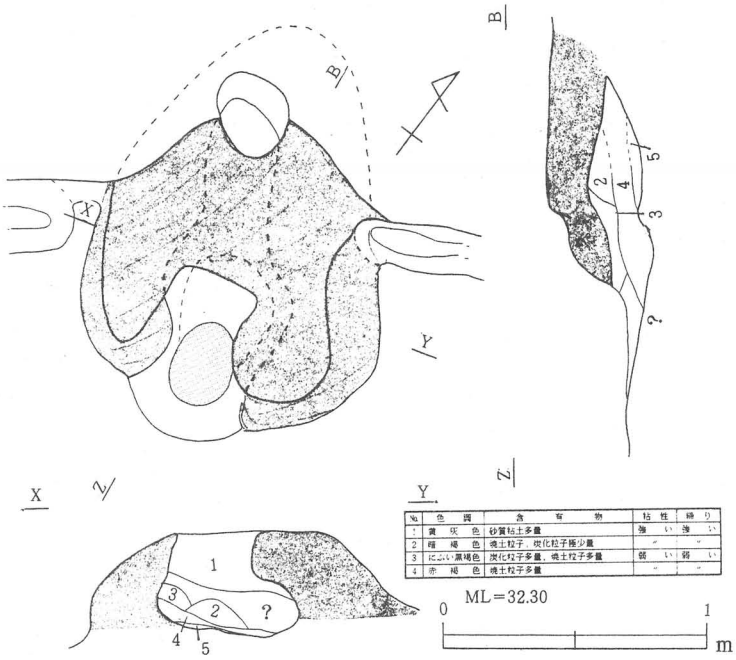
本遺構は，２号住居跡の西側に位置し単独で検出された。主軸をＮ－32°－Ｗに置き東西6.4

m，南北6.15cmを測り大型方形プランの住居跡である。掘り込みは30cm程で床面は平坦，貼床で中心部，竈前面を中心に締りをもつ。柱穴は半V字状で片側からたてたと推察できる掘り方で径60～80cmで円形状形態で掘り込みは70cm～1 mと深い。周溝は幅広く竈部分を除き一周する。やや深い。

竈は，半円状に外側に張り出す。火床部は前面に位置若干掘込む。袖部は西側に傾き長さ1.50 m，1.1 mと変速的で長い袖をもつ。・煙道部は1m程外側に位置し倒卵形形態。砂質粘土を用いて構築している。

覆土は，5層で色調は黄褐色，褐色，淡い赤褐色等で砂質粘土，焼土粒子を含む。堆積状態は自然埋積で有る。

遺物は，多量の土製丸玉が出土している。43個で最高が52㌘で最低11㌘。平均25～35㌘前後が大多数である。本遺構の住人の生活の一部をかいま見る。その他皿に近い坏が見られる。2は口縁部が欠失した碗型土器で胴部は内傾する。3は断面三角形の土製支脚で上部はかなり変形している。重さは1,030㌘とかなり大型のもので有る。そのほか打製石器，フレイク状石器，紡錘車6が出土している。

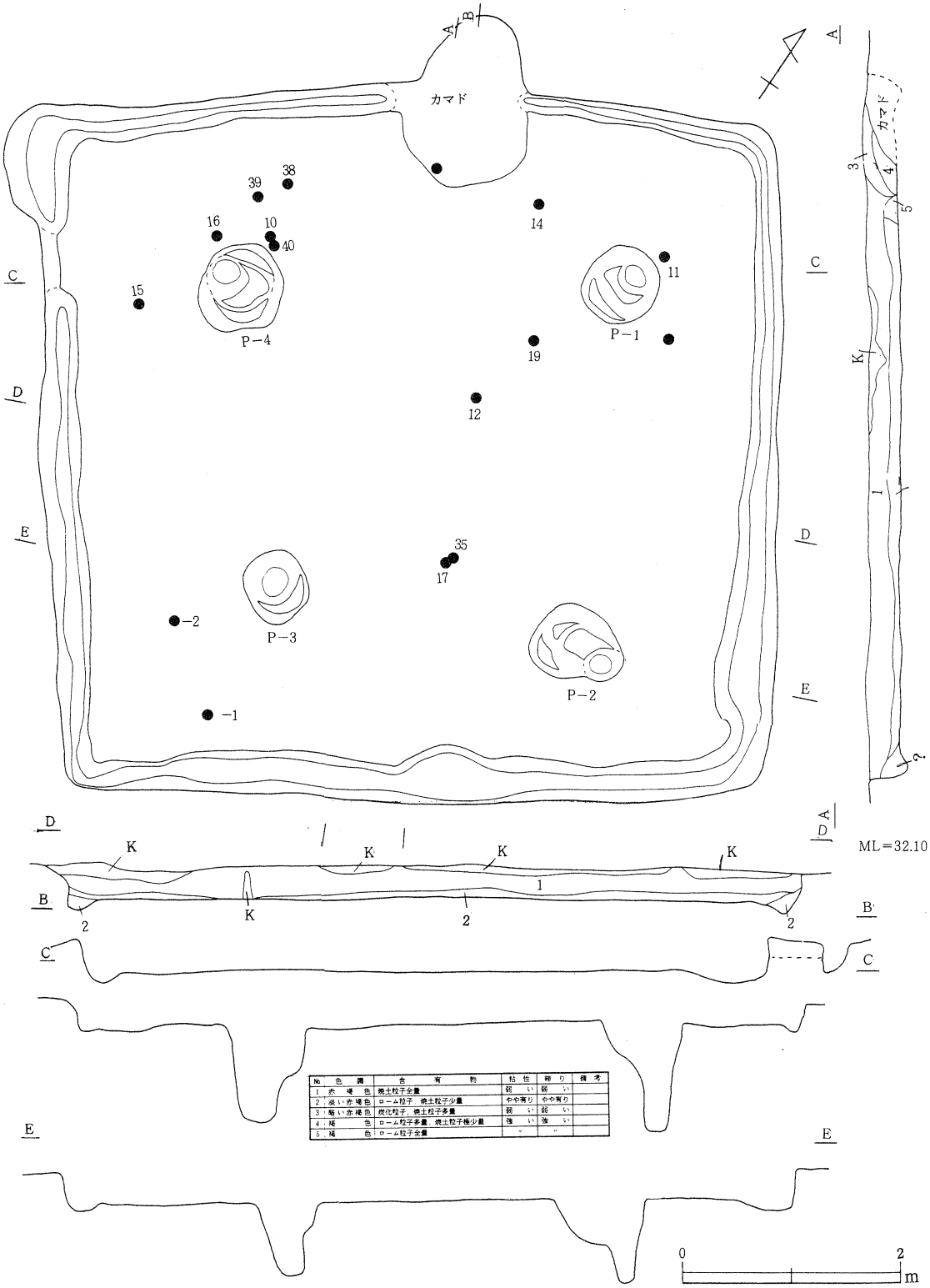


№	色調	含有物	粘性	締り
1	黄灰色	砂質粘土多量	強い	強い
2	暗褐色	焼土粒子，炭化粒子極少量	〃	〃
3	にぶい黒褐色	炭化粒子多量，焼土粒子多量	弱い	弱い
4	赤褐色	焼土粒子多量	〃	〃

第8図　第3号住居跡カマド実測図

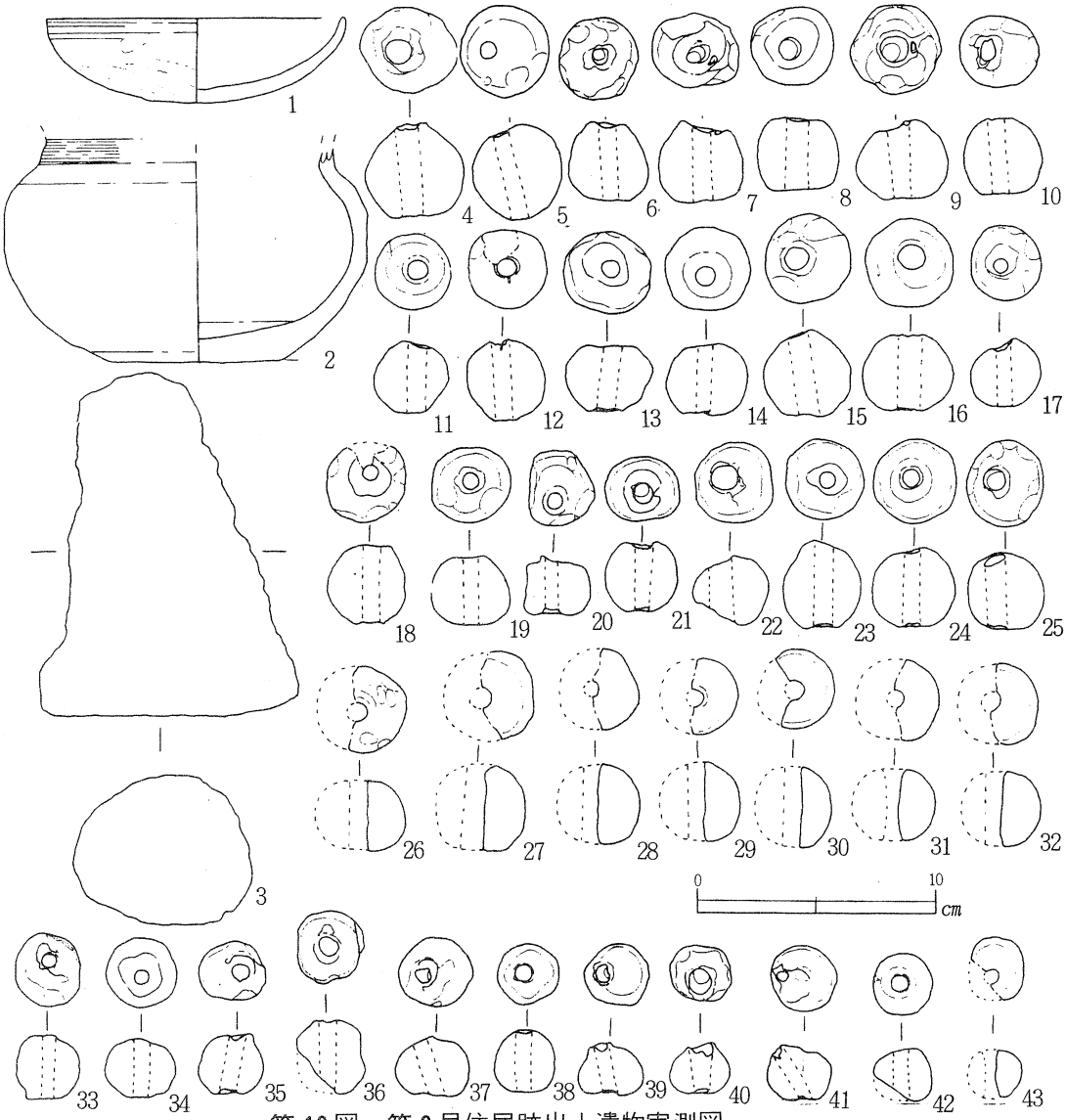
出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土•色調•焼成	備考
1	坏 土師器	A 12.5 B 3.5 C 4.5	輪積み成形か。皿状の形態で口唇部は直立，尖る。内面黒色？	横ナデ ナデ ヘラケズリ	細石 黄褐色 普通	覆土中 90%
2	碗 土師器	A － B － C 7.2	口縁部欠失し一部不明であるが碗形土器でややつぶれた形態，口縁部は	横ナデ ナデ	細石 褐色 普通	90%



No.	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	赤褐色	焼土粒子全量	弱い	弱い	
2	淡い赤褐色	ローム粒子、焼土粒子少量	やや有り	やや有り	
3	暗い赤褐色	炭化粒子、焼土粒子多量	弱い	弱い	
4	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子極少量	強い	強い	
5	褐色	ローム粒子全量	〃	〃	

第9図　第3号住居跡実測図



第10図　第3号住居跡出土遺物実測図

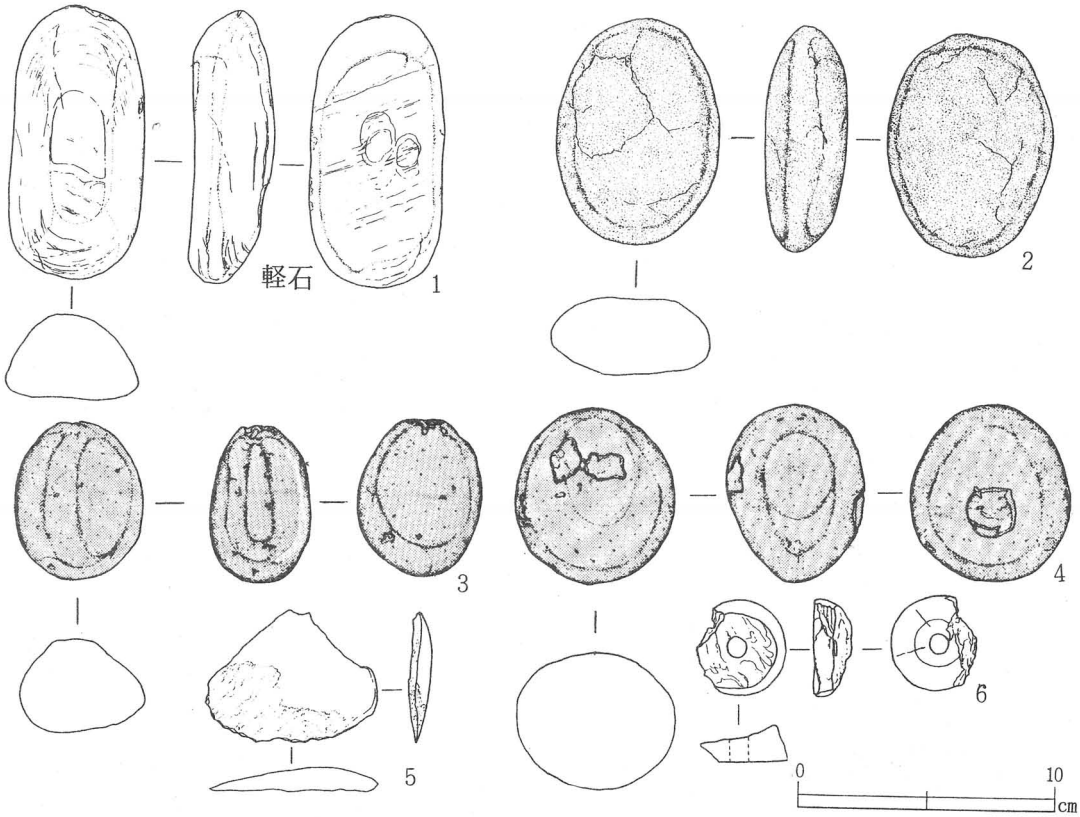
土製品一覧表

番号	器　種	法　量（cm）			重量(g)	材 質	出土地点	備　　考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
3	土製支脚	14.4	15.7	6.3	1,030	土　製	カマド中	三角形状形態で赤褐色を呈する
4	土　玉	3.8	4.0	1.0	39	土　製	覆 土 中	カマド内
5	〃	3.9	3.8	0.7	52.5	土　製	〃	
6	〃	3.4	3.4	0.7	35	土　製	〃	
7	〃	3.1	3.7	0.8	39	土　製	〃	

土製品一覧表

番号	器種	法量（cm）			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
8	土玉	3.3	3.5	1.0	35	土製	覆土中	ほぼ完形
9	〃	3.8	3.9	1.0	37	〃	〃	〃
10	〃	3.1	3.4	0.8	31	〃	〃	〃
11	〃	3.0	3.2	0.8	27	〃	〃	〃
12	〃	3.5	3.2	0.8	36	〃	〃	〃
13	〃	3.4	3.7	1.0		〃	〃	〃
14	〃	3.0	3.6	0.8	34	〃	〃	〃
15	〃	3.6	3.5	1.1	43	〃	〃	〃
16	〃	3.2	3.3	1.1	42	〃	〃	〃
17	〃	2.9	3.0	0.6	26	〃	〃	〃
18	〃	3.3	3.4	0.7	32.5	〃	〃	〃
19	〃	3.1	2.9	0.6	31	〃	〃	〃
20	〃	2.4	2.8	0.7	21	〃	〃	〃
21	〃	2.9	3.2	0.8	23	〃	〃	〃
22	〃	2.9	3.3	1.1	26	〃	〃	〃
23	〃	3.4	3.3	0.7	34	〃	〃	〃
24	〃	3.6	3.5	0.6	41	〃	〃	〃
25	〃	3.6	3.2	0.9	32	〃	〃	〃
26	〃	2.8	—	—	20.5	〃	〃	欠失部をもつ
27	〃	3.4	—	—	17	〃	〃	〃
28	〃	3.6	—	—	22	〃	〃	〃
29	〃	3.4	—	—	17	〃	〃	〃
30	〃	3.3	—	—	20	〃	〃	〃
31	〃	3.0	—	—	16	〃	〃	〃
32	〃	3.2	—	—	19	〃	〃	〃
33	〃	2.7	2.7	0.6	21.5	〃	〃	ほぼ完形　やや小形
34	〃	2.5	3.0	0.7	19.5	〃	〃	〃　〃
35	〃	2.6	2.8	0.7	16	〃	〃	〃　〃
36	〃	3.1	2.8	0.9	21.5	〃	〃	〃　〃
37	〃	2.5	3.1	0.7	20	〃	〃	〃　〃

番号	器種	法量 (cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
38	土玉	2.6	2.5	0.7	17	土製	覆土中	〃
39	〃	2.2	2.8	0.6	10.5	〃	〃	〃
40	〃	2.2	2.5	1.0	11	〃	〃	〃
41	〃	2.4	2.7	0.5	17	〃	〃	〃
42	〃	2.3	2.4	0.7	11	〃	〃	一部欠失 〃
43	〃	2.6	—	—	9.5	〃	〃	〃 〃



第11図　第3号住居跡出土遺物実測図

石器一覧表

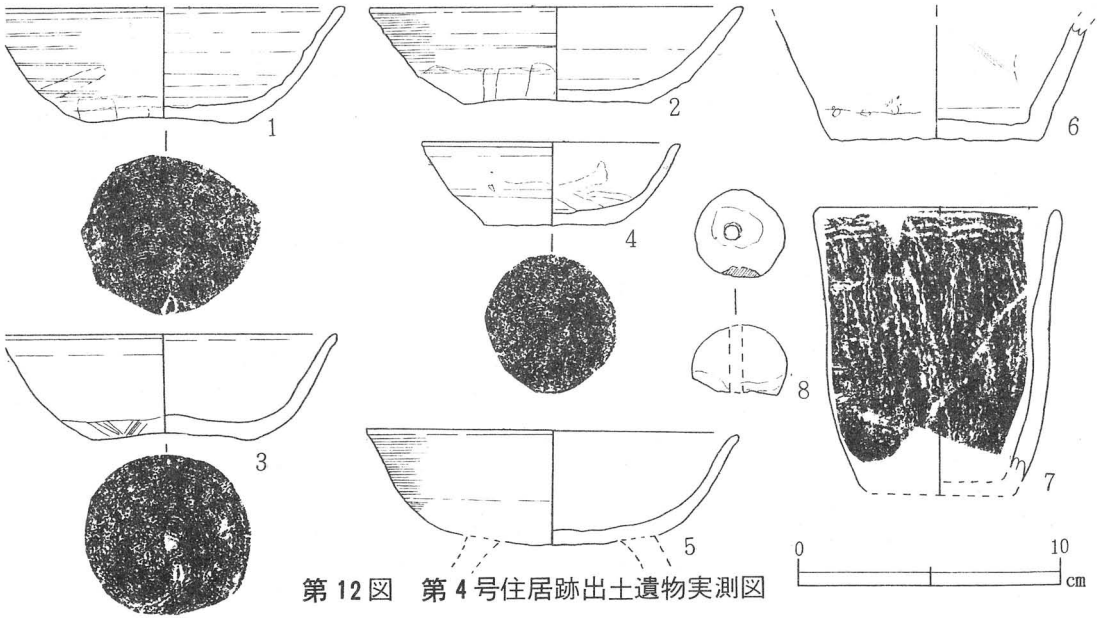
番号	器種	法量 (cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
1	浮子？	10.7	5.1	3.3	270	軽石	覆土中	中央部凹部有り

番号	器種	法量（cm）			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
2	浮子？	8.7	6.5	3.0	259	安山岩	覆土中	打製石器
3	石器	3.6	5.0	3.6	150	〃	〃	〃
4	石器	6.9	6.3	5.3	290	〃	〃	〃
5	石器	5.1	6.6	0.9	36	チート	〃	〃
6	紡錘車	3.7	3.5	1.4	21	土製	〃	

4号住居跡　（第12図，第13図）

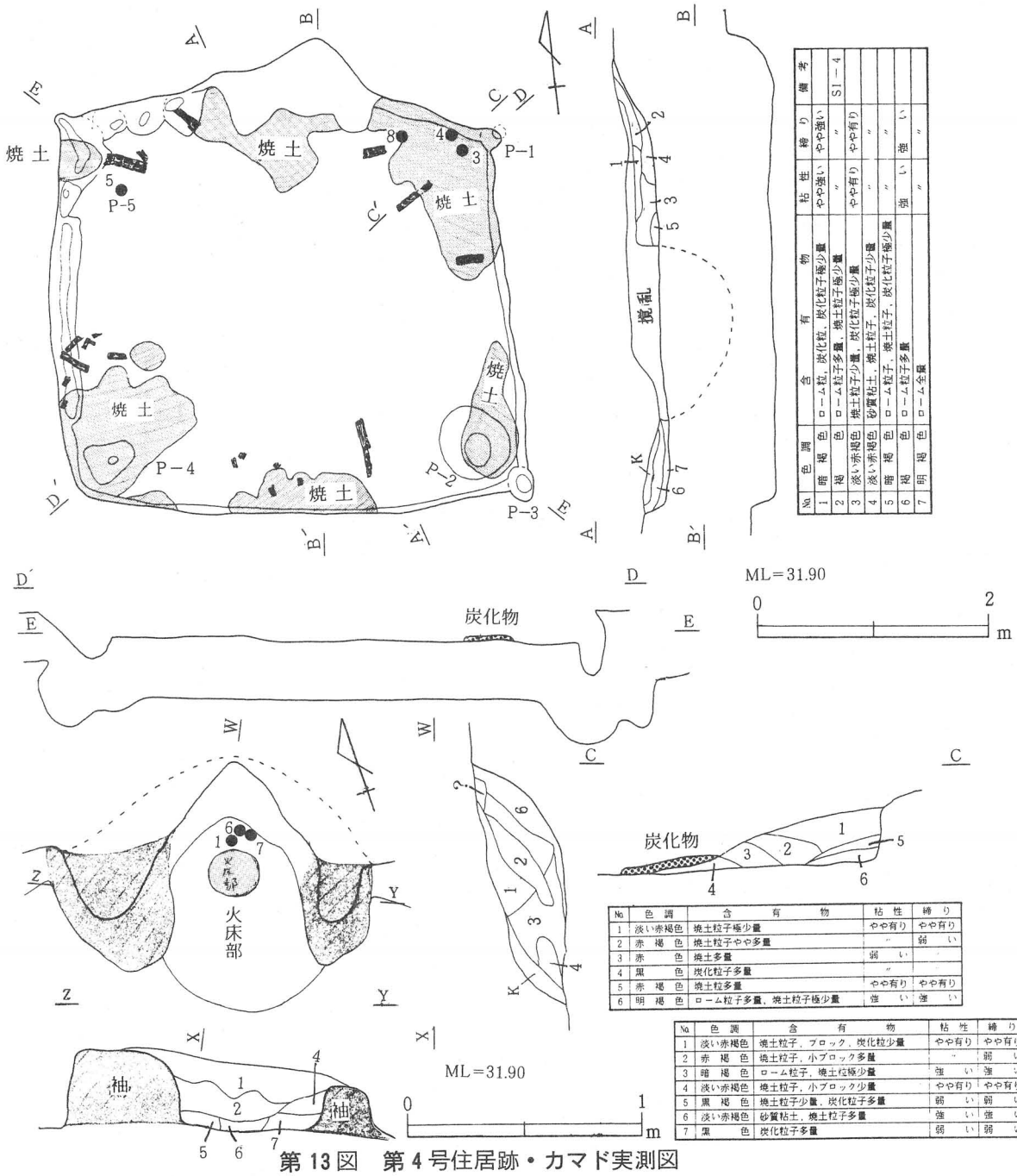
本遺構は，さも西側に位置し地形は南，西側に僅かに傾斜を示す。中心部に1.5 mの円形状の撹乱が見られた。主軸をN－2°－Wに置き東西3.9 m，南北3.8 mでほぼ方形プランを呈する。掘り込みは20～40cmで傾斜がこれからも窺える。周辺には焼土，炭化物が多量に検出されている。家屋，建築工法が復元出来る程のものはなく壁面から中央部に向かって伸びる〝たるき〟の一部が推察される。周辺には焼土粒子が多量に散在している。床面は貼り床で有る。

柱穴は，検出されず西側隅部にピットが見られたが柱穴とは違和感が有る。径40～50cm，深さは20cmと40cmで有る。その他隅に円筒形状の30cm程の小ピットが見られる。竈は，北壁面に位置しU字状に掘り込み砂質粘土粘土を用いて構築している。大部分1 m程遺構内部に袖部を延ばし外側はローム層を掘込む。火床部は僅かに掘り込み奥部に径45cm程の円形状形態をもつ。煙道はやや急角度で立ち上がる。



第12図　第4号住居跡出土遺物実測図

遺物は，小型であるが高台付きの高坏，皿状の小型の坏，体部が外反し器肉が薄く底部に回転糸きり痕を残す坏がみられる。7は浮島式土器で小型の鉢，アナダラ族の貝殻文がまばらに施文されている。その他土製丸玉が出土している。国分期の遺構と推察される。



No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	暗褐色	ローム粒，炭化粒，炭化粒子極少量	やや強い	やや強い	
2	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子極少量	〃	〃	SI－4
3	淡い赤褐色	焼土粒子少量，炭化粒子少量	やや有り	やや有り	
4	淡い赤褐色	砂質粘土，焼土粒子，炭化粒子少量	〃	〃	
5	暗褐色	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子極少量	〃	〃	
6	褐色	ローム粒子多量	強い	強い	
7	明褐色	ローム全量	〃	〃	

No	色調	含有物	粘性	締り
1	淡い赤褐色	焼土粒子極少量	やや有り	やや有り
2	赤褐色	焼土粒子やや多量	〃	弱い
3	赤色	焼土多量	弱い	
4	黒色	炭化粒子多量	〃	
5	赤褐色	焼土粒多量	やや有り	やや有り
6	明褐色	ローム粒子多量，焼土粒子極少量	強い	強い

No	色調	含有物	粘性	締り
1	淡い赤褐色	焼土粒子，ブロック，炭化粒少量	やや有り	やや有り
2	赤褐色	焼土粒子，小ブロック多量	〃	弱い
3	暗褐色	ローム粒子，焼土粒極少量	強い	強い
4	淡い赤褐色	焼土粒子，小ブロック少量	やや有り	やや有り
5	黒褐色	焼土粒子少量，炭化粒子多量	弱い	弱い
6	淡い赤褐色	砂質粘土，焼土粒子多量	強い	強い
7	黒色	炭化粒子多量	弱い	弱い

第13図　第4号住居跡・カマド実測図

出土土器観察表

番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備 考
1	坏 土師器	A 13.8 B 4.4 C 6.2	ロクロ水挽き成形で水挽痕を残す。底部回転糸切り。体部は直立的で口唇部は丸く収める。	ロクロ水挽き ナデ 回転糸切り	スコリア・長石 橙褐色 普通	カマド内 床直 60%
2	坏 土師器	A 12.8 B 3.8 C 9.0	ロクロ水挽きの作りであるが若干内面がすれている。一部赤採底部回転糸切り底（内，淡い赤褐色）	ヘラケズリ ロクロ水挽き	長石・スコリア 黄褐色 普通	覆土中 完形
3	坏 土師器	A 14.1 B 3.6 C 7.0	ロクロ水挽き，内外とも２次焼成を受け淡い赤褐色，口縁部媒付着。体部は外反し口唇部は尖り気味。	ロクロ水挽き ナデ	雲母・細石 淡い赤褐色 やや不良	覆土中 40%
4	坏 土師器	A 9.8 B 3.1 C 5.1	外側は媒を内側は黒色，灯明皿に近い小型の坏，内側には媒の付着はない。	ロクロ水挽き 底部ナデ	細石 長石 } 極少量 黒褐色 普通	覆土中 完形
5	高台坏 土師器	A 14.2 B － C －	高台部欠失し不明。やや直立気味で直立し短いか。口縁部内側黒色。付部は内湾気味口唇部丸味をもち外反。	ロクロ水挽き ナデ 付高台	スコリア 黄褐色 普通	覆土中 60%
6	鉢 土師器	A － B － C 8.0	器肉の薄い小形の鉢形土器と思われ，胴部は直立気味に立ち上がる。２次焼成を受ける。	輪積み ナデ	スコリア 黒赤褐色 やや不良	カマド内 床直 10%
7	小鉢状 深 鉢	A 9.2 B － C －	アナダラ属の貝殻波状文と施文。口縁部に３本の沈線がめぐる。	ナデ 貝・サルボウ	細石 暗褐色 普通	覆土中 40%

土製品一覧表

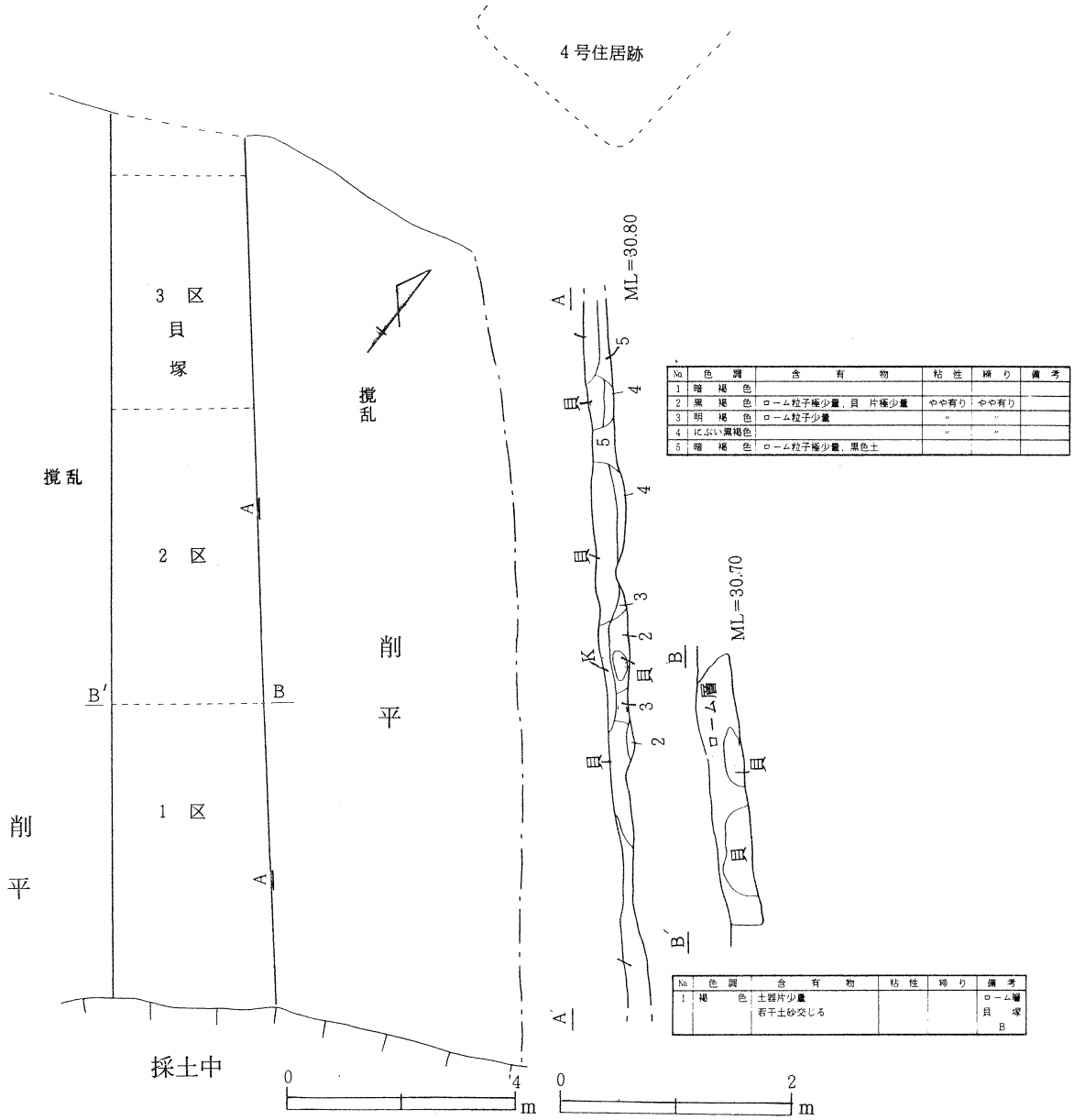
番号	器 種	法 量 (cm)			重量(g)	材 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
8	土 玉	3.6	2.5	0.7	30.5	土 製	床 直	約$\frac{1}{3}$を欠失，不整形な形状か。

V 貝 塚 （第14図）

本遺跡は，前述のとうり貝の発見からの調査となりその他遺存部に５軒の住居跡が検出された。貝塚の調査が本命であるが遺存状態は非常に悪く大半を大型重機により欠失しており最悪の遺存状態でわずかに下層部が遺存していたにすぎなく，いずれもブロック状に見られた。その他調査終了まじかになって遺跡東側の斜面中位から重機による土採取の予備の為表土を削平したところ新たな小規模な貝層が検出された。これらの貝は土嚢袋で約80袋程であり以下貝層はすべて１層とし述べる。土器も同様で１層として述べる。土器は総数1,000片程出土した。東側の新しく発見された部分の土器は比較的遺存状態は良く75片程図示した。以下土器について述べる。

1. 土 器 （第15図，第16図，第17図，第18図，第19図）

第15図は，１～８は胎土に繊維を多量に含む。半裁竹管による押し引き沈線を横位，斜め等に



No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	暗褐色				
2	黒褐色	ローム粒子極少量，貝 片極少量	やや有り	やや有り	
3	明褐色	ローム粒子少量	〃	〃	
4	にぶい黒褐色		〃	〃	
5	暗褐色	ローム粒子極少量，黒色土			

No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	褐色	土器片少量 若干土砂交じる			ローム層 貝塚 B

第14図　貝塚実測図

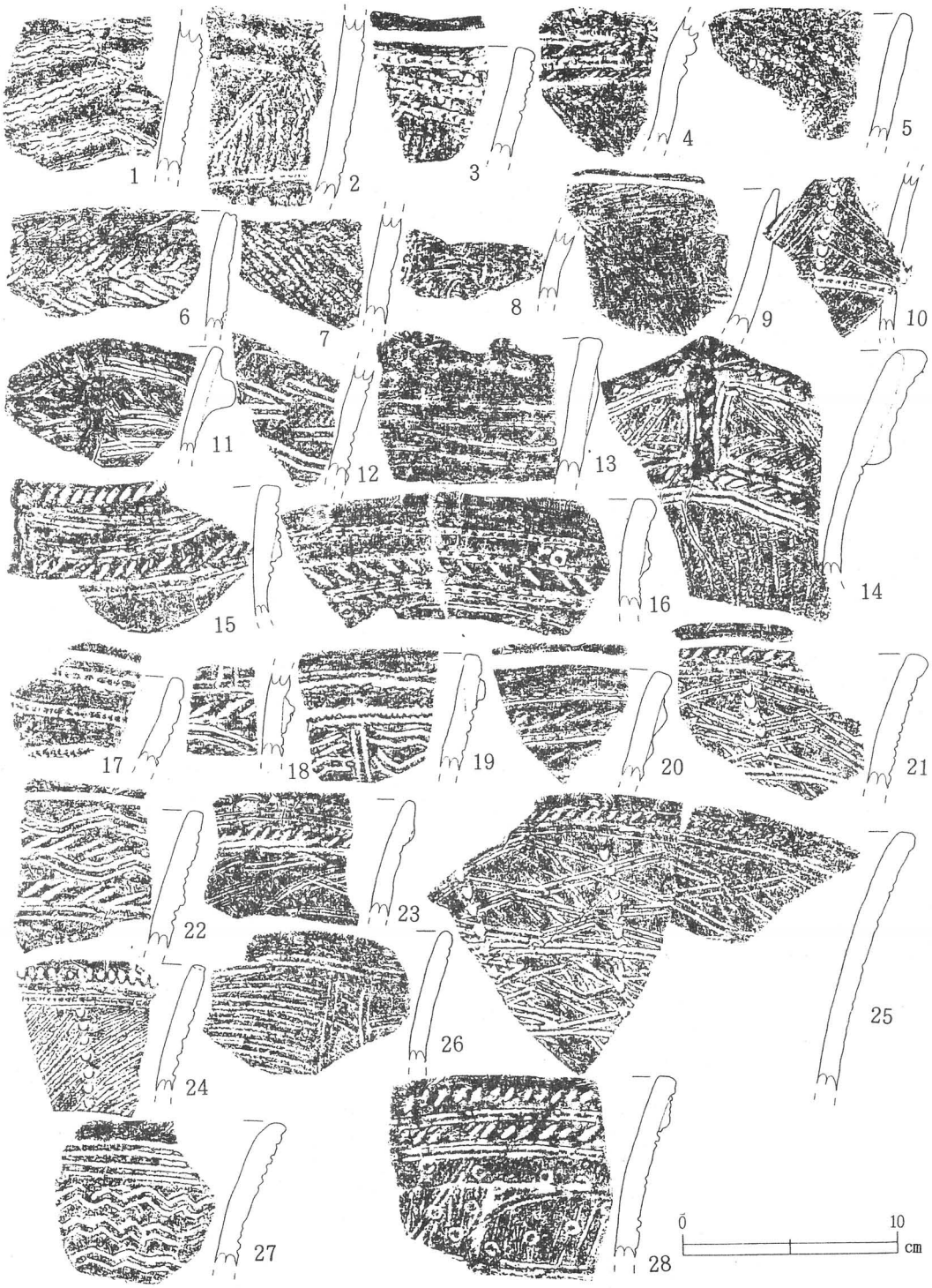
2段，3段施す1，2，3，4，5が見られ地紋にアナダラ属の貝を用い施文する2が見られる。その他は節の大きい単節の縄を施す3，5，7。撚糸紋を羽状に施す6が有り芽山上層式に比定される。9も条痕をもつ土器で，いずれも裏面は丁重なナデで有る。10は山形の口縁部をもつ土器で繊維は含まない浮島1a式土器。11は諸磯bの深鉢胴部。11～21は浮島式で平行沈線紋，波状貝殻紋，爪形紋を施文している。28は竹管紋と隆帯に刻み目を施す。隆帯に刻み目もつ15，21，23，24，25は同様な口縁を呈し地紋に平行沈線紋，竹管刺突，鋸歯状紋が施文されほぼ

平縁でやや外反する深鉢で有る。11，13，14は浮島Ⅱ式の新しい部分に該当しⅢに近い。胎土には長石が含まれる。

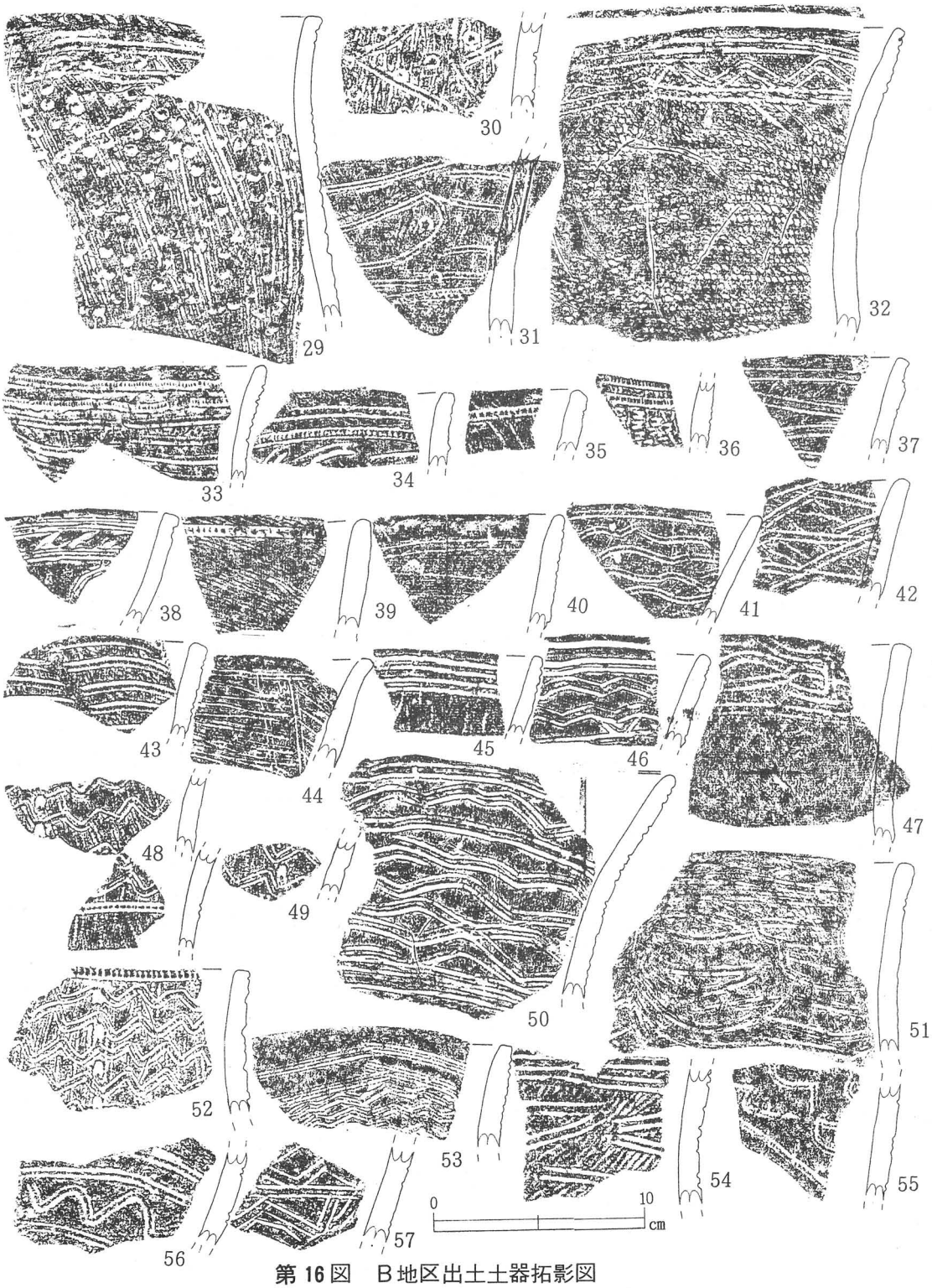
第16図も東側斜面部の土器群でいずれも浮島式の土器群で口縁部は平縁で隆帯をもたない一群で半裁竹管の爪型紋，平行沈線紋，竹管紋等が見られる。口縁部が若干外反する深鉢型土器で波状紋，幾何学的構成，鋸歯状紋が見られ文様帯下位は無紋になる。口縁部形態はやや丸みをもつ器形と角張る形態が見られる。地紋として30～32，54のように縄文が疎らに施文されるものもある。また39のように撚り糸紋が施文される者もある。胎土は砂礫，長石を含む。色調は全体的には鈍い黄褐色，黒褐色で有る。

第17図58は，多量に砂を含みややもろい土器で浅い平行沈線紋が疎らに施されている。59は，胴部に穿孔が見られる粗雑な作りの土器で地紋は単節の縄のみで器面も調整は粗い。60は小突起をもつ土器で地紋はアナダラ属の貝殻紋を施し４本単位鋸歯状紋が口縁部を巡る。61から68までは鋸歯紋のみで押圧の強い者と弱い者とに分かれる。69からは施文具にハマグリを用いたもので71は線状に短い。72，73は疎らな無節の縄をもつ。いずれも胎土，色調から浮島式の粗製の深鉢で有る。59，60，61，64，66は浮島Ⅱ式で有る。74は縄文中期後半加曽利ＥⅢの口縁部キャリパー形態の土器で黒褐色。75は大型の皿状土器で有る。78も底部で無節の縄が底部まで施文されている。77，78とも円筒形状。本貝塚では加曽利Ｅ式が１片検出されたのみで，ほぼ浮島式単独の貝塚と断定される。本域では唯一の貝塚で有る。

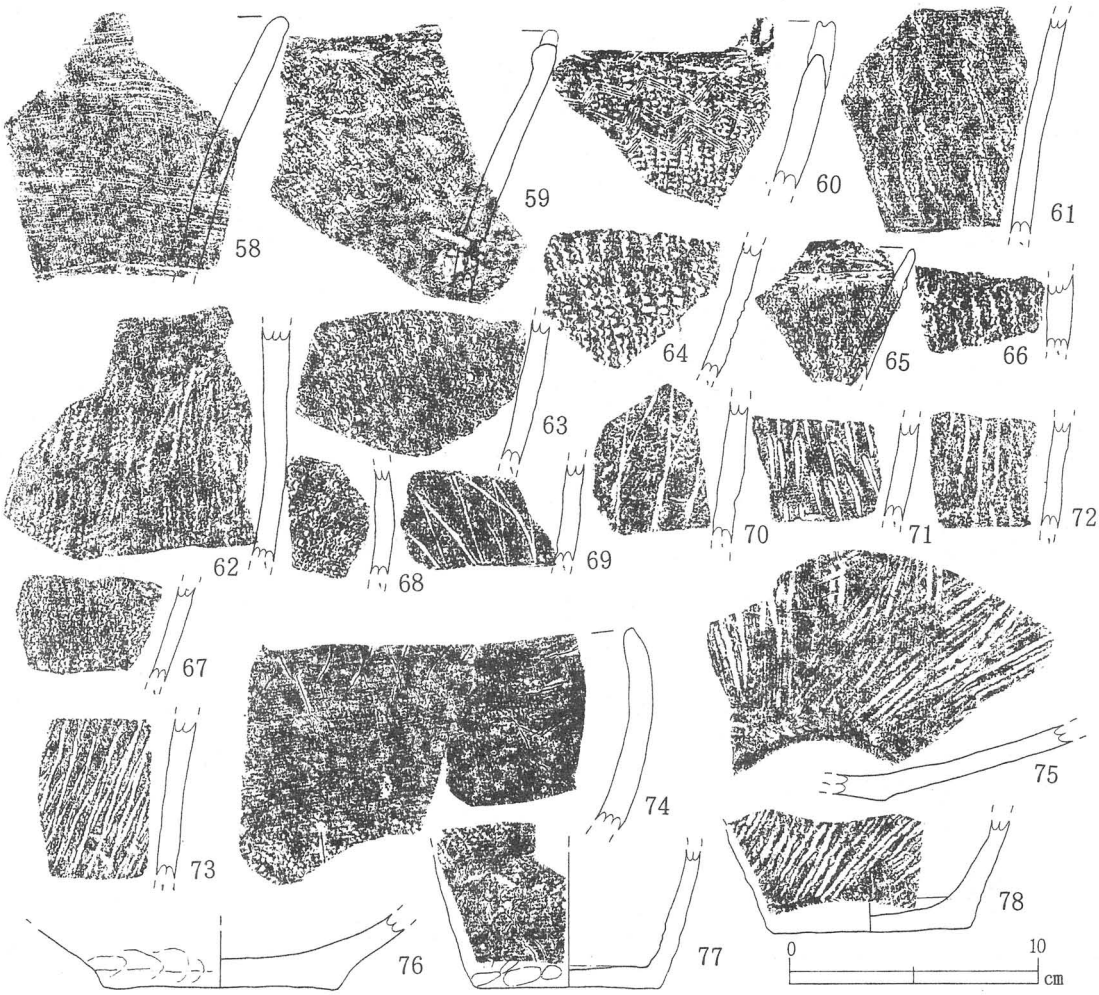
18図からは各住居跡から出土した土器群で一応浮島式を主として図示した。その他若干時期がずれる土器が極少量見られた土器を図示した。地紋は節の大きい疎らな単節の縄紋をもち多量に繊維を含む土器で口唇部に押圧を加える。平縁の深鉢型土器の口縁部でヘラ状工具で斜位に調整されている１と縦位の沈線をもつ２が見られ芽山下層式で本土器群は非常に少なく総数10片前後であった。５は，東北の大木５式に該当する沈線紋を主体とした土器で本例のみであった。３，４は，半裁竹管の押し引き爪型紋を施文する。口縁部は平縁，６は山形の突起をもつ深鉢の土器で半裁竹管押し引きが密に施されている。７，９，10，11，12は口縁部は平縁，平行沈線を鋸歯状，押し引きが見られる浮島１ａ式。その他はほぼ１，２式に伴う土器群で前述の17図の土器とはそれ程の差はない。13，15，16は平行沈線紋を主体としている。14はヘラに依る調整。17にはアナダナ属の施文が見られる。22はハマグリ状の沈線紋が見られるのみ。23は撚糸紋が疎らに施文され剥落欠失が円形状に見られいずれの土器も砂の混入が多い。24は三角状の半裁竹管で押し引き爪型文。25～27は地紋にＲ．Ｌの細かい縄文が施文諸磯Ａ式か，28から43は半裁竹管弐よる押し引き爪型紋が複数配列されている。44から63は口縁部に１㎝前後の縦位の条線紋を１列，又は２列配列し口唇部は三角形に尖る。地紋は不明。54は，口縁部に縦位の条線紋を巡らし下位に三角紋をもつ土器で本例の他10片程検出されている。64は弱い波状をもつ土器で器面は磨消され



第15図　B地区出土土器拓影図



第16図　B地区出土土器拓影図

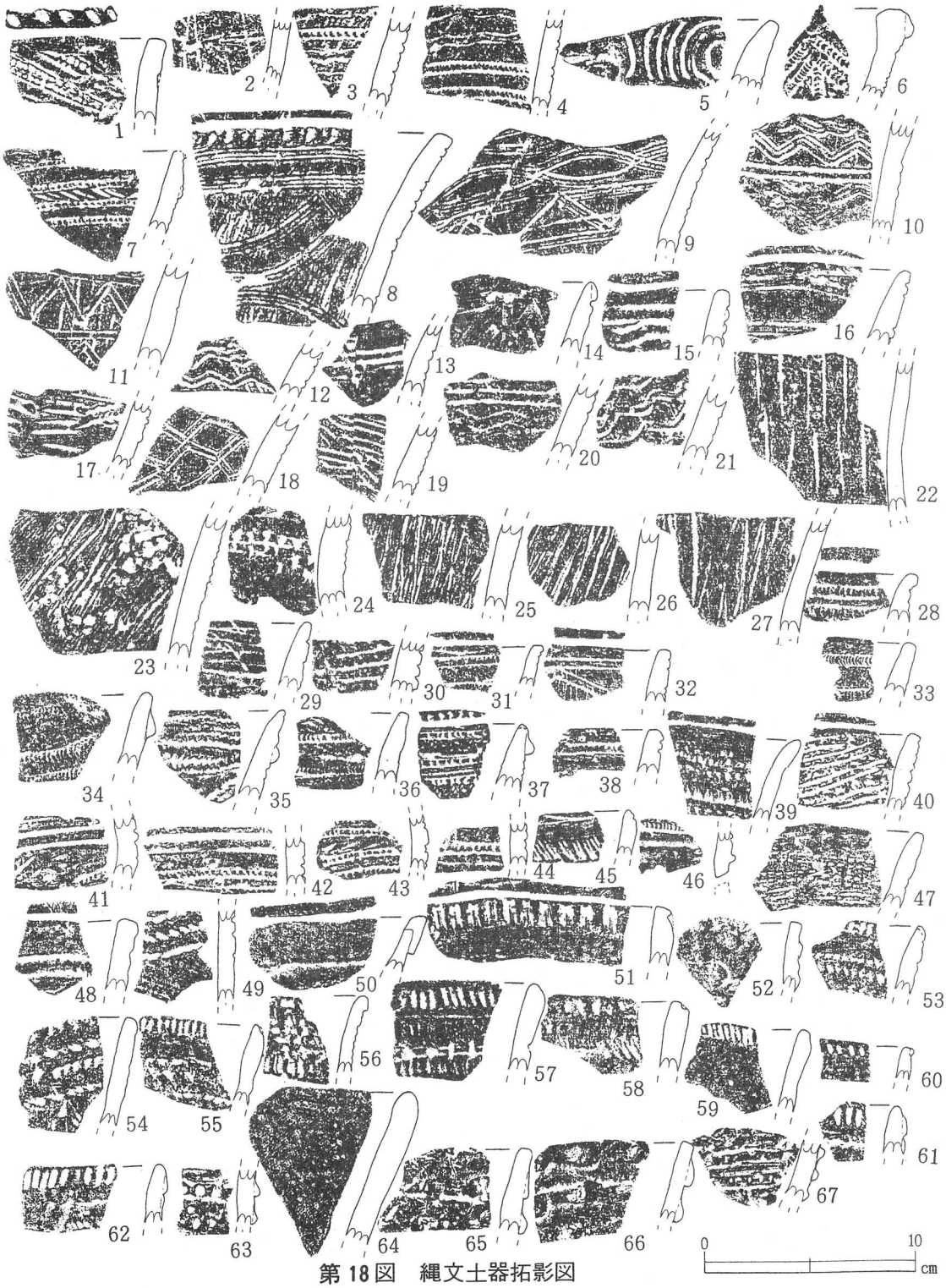


第17図　B地区出土土器拓影図

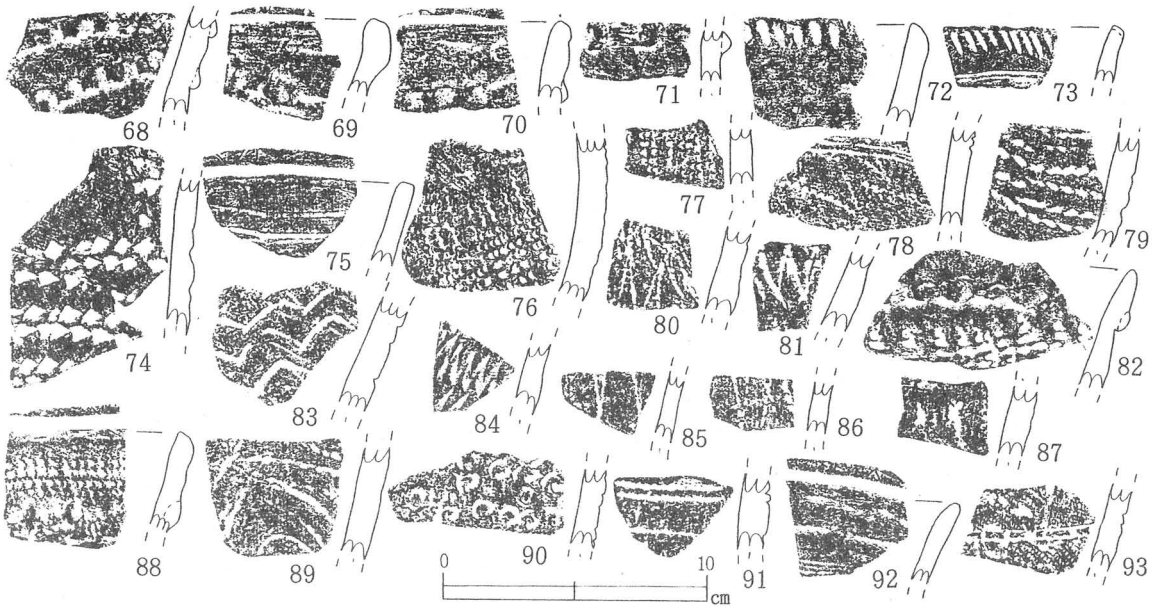
出土土器観察表

番号	器　種	法量（cm）	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備　考
76	大 皿 ？ 縄文深鉢	A　－ B　－ C　10	大形の皿？と思われ安定した平底から強く外反している。皿状器形と推察される。底部のみ。	ナデ ヘラケズリ 指頭ナデ	長石・細石 黒褐色 普通	覆土中 10%
77		A　－ B　－ C　7.6				
78	深　鉢 縄　文	A　－ B　－ C　8.0	平底で円筒状形の深鉢。無類の縄と施文。	ナデ 輪積み	細石・雲母 黒褐色 普通	覆土中 10%

加曽利ＥⅣ式の深鉢型の口縁部戸推察される。65，66は全体的には１割程見られ口縁部は平縁で２，３段の輪積み痕をもちそこに指頭による押圧を加えている。器面は擦痕が見られる。これらは浮島式２式土器で有る。19図68～71も同様で有る。72，73も前述の条線紋を施す一群の土器で



第18図　縄文土器拓影図



第19図　縄文土器拓影図

有る。76から88は波状貝殻紋が施文される。施文具の貝はハマグリ，アナダラ属で他のは見られない。非常に粗い者と細かなもの，波長の大きいものが見られる。これらは浮島Ⅰ式からⅡ式に渡り破片からは特定は難しい。

82は輪積み痕に指頭による押圧を加え下位に波状貝殻紋を施す土器も見られる。90は竹管刺突の竹管紋が見られる。本類は前述のとうり出土遺物の1割にも満たない。

74は，三角紋を2列，2段に施しやや大型の円筒気味の土器で口縁部が若干外反する器形と推察される。本土器群の新しい時期にはいる。

これらの遺物から本貝塚はいずれも浮島Ⅰ・Ⅱ式を主体とした貝塚で極一時期短時間の内に営まれたと理解される。

Ⅵ　貝　　類

本貝塚から出土した土器は台地上，東側斜面部とも貝類，土器とも時期の差はない。以下，貝の堆積状態の現状と層位，貝類遺体，脊椎動物遺体，その他の順に述べる。

1. 層　位　（第14図）

本貝塚は，前述のとうり削平撹乱を受け層位を明確に捉えることは不可能で土の中に貝が遺存していた状態であった。（第14図）そのため先端部から1区，2区，3区と平面的に地区割りし調査を進めた。1区先端はすでに土砂が採集され欠失しかなりの段差をもつ。貝は，上面部から

調査を進め篩に掛けて土嚢に入れて採集し，水洗いを行い種別，大小，計測を行なった。篩の目は4㎜を通しのち1㎜を使用した。

この貝塚の東側の地点からも大型重機で雑木処理中に小貝塚が発見された。本貝層も焼土，灰が混入した貝層で大半の貝が火を受て変色していた。面積的には3ｍ×2ｍ前後で厚さ30㎝程の貝層であった。1区の貝種も。

1㎜の網を用い水洗いし選別，計測作業を進めた。骨製品は1点も見られない。

2. 貝　類

貝種の分類

本貝塚は，今度の土砂採集で初めて発見された為貝塚の名称はない。従って字名を用い四部貝塚と命名した。

種名の同定

本貝塚は，新発見の為今日迄研究の資料は皆無で有る。発掘調査で出土した貝類は次のとうりで有る。腹足綱15種，掘足綱2種，斧足綱14種の合計31種である。貝種の比定にあたり二枚貝は殻頂の遺存するものは左右に分類しすべて取り上げてそれぞれ目安と成る殻長，重さの計測を行なった。巻貝では全体の50％前後の遺存率を1個体とし個体数とした。

四部切貝塚出土貝類遺体一覧

腹 足 綱	Class GASTROPODA
ニシキウズガイ科	Family Frochidae
1. ダンベイキサゴ	Umbonium (Suchium) giganteum
2. イボキサゴ	Umbonium (Suchium) moniliferum (Lamarck)
カワニナ科	Family Pleuroceridae
3. カワニナ	Semisulcospira libertina (Gould)
ウミニナ科	Family Potamididae
4. フトヘナタリガイ	Cerithidea rhizophorarum
5. ヘナタリガイ	Ceritthideopsilla cingulata
6. カワアイガイ	Ceritthideopsilla djadjariensis
7. イボウミニナ	Batillaria zonalis
8. ウミニナ	Batillaria mnltiformis
9. ホソウミニナ	Batillaria cumingii

タマガイ科　　Family Naticidae

10. ツメタガイ　　Glossaulax didyma

アクキガイ科　　Family Muricidae

11. アカニシ　　Rapana venosa

12. イボニシ　　Reishia clavigera

エゾバイ科　　Buccinidae

13. バ　イ　　Babyloniu japonica (REEVR)

オリイレヨフバイ科　　Family Nassariidae

14. アラムシロガイ　　Reticunassa festiva

掘足綱　　Class SCAPHOPODA

ツノガイ科　　Family Dentaliidae

15. ヤカドツノガイ　　Dentalium (Paradentalium) octangulatum (Dononan, 1)

16. ツノガイ　　Antalis weinkauffi

斧足綱　　Class PELECYPODA

フネガイ科　　Family Arcidae

17. アカガイ　　Scapharca broughtonii

18. サルボウガイ　　Scapharca subcrenata

19. ハイガイ　　Tegillarca granosa

ナミマガシワガイ科　　Family Anomiidae

20. ナミマガシワガイ　　Anomia chinensis

イタボガキ科　　Family Ostreidae

21. マガキ　　Crassostrea gigas

22. イタボガキ　　Ostrea denselamellosa LlscHKB.

イシガイ科　　Family Unionidae

23. イシガイ　　Unio douglasiae

シジミ科　　Family Corbiculidae

24. ヤマトシジミ　　Corbicula japonica

25. オキシジミガイ　　Cyclina sinensis (GMELIN)

マルスダレガイ科　　Family Veneridae

26. ハマグリ　　Meretrix lusoria

27. カガミガイ　Desinorbis (Phacosoma) japonicus
28. オキシジミ　Cyclina sinensis
29. アサリ　Ruditapes philippinarum

バカガイ科　Family Mactridae
30. バカガイ　Mactra chinensis
31. シオフキガイ　Mactra veneriformis
32. ミルクイガイ　Tresus keenae

ナミノマガイ科　Donu cldae
33. クジナミガイ　Hlatula bololi ng hawsi (LiscHKE)

アシガイ科　Family Psammobiidae
34. ムラサキガイ　Hiatula diphos

ニッコウガイ科　Family Tellinidae
35. ヒメシラトリガイ　Macoma incongruna

マテガイ科　Family Solenidae
36. マテガイ　Solen strctus

オオノガイ科　Family Myidae
37. オオノガイ　Mya (Arenomya) arenaria oonogai

本貝塚の出土貝類は，現在も大部分が内湾水域の所産で一部沿岸水域が含まれる。また僅かに湖沼，河川のものも見られた。

沿岸水域のものには外海岩礁性のものイボニシ，イガイ，沿岸砂泥質のツノガイ，ムラサキガイ，沿岸砂質性のダンベイキサゴ，バカガイが見られる。

内湾水域では岩礁性のイボニシ，ナミシワガイ，砂底性のイボキサゴ，ツメタガイ，サルボウガイ，ハマグリ，カガミガイ，アサリ，シオフキ，ミルクガイ，ヒメシラトリガイ，マテガイ，オオノガイが見られる。シルト～泥質性のアカニシ，アカガイが有る。砂泥質干潟性のヘナタリガイ，カワアイガイ，イボウミニナ，ウミニナ，ホソウミニナ，アラムシロ，マガキ，オキシジミ，アサリが見られる。同じく砂泥質の感潮域のフトヘナトリガイが見られる。その他淡水域のカワニナ等が見られる。

1　区

	種　　名	左　・　右	個体総数	殻　　長	そ　の　他
腹	ダンベイキサゴ		21	1.5 ～ 2.5	小型
	イボキサゴ		6	2.0 ～ 3.0	少ない
	カワニナ		0		
	フトヘナトリガイ		16	1.5 ～ 3.1	少ない
	ヘナタリガイ		45	2.5 ～ 3.5	やや多い
	カワアイイガイ		61		〃
	イボウミニナ		4	1.0 ～ 2.7	少ない
足	ウミニナ		23		〃
	ホソウミニナ		51		〃
	ウミニナ		20	1.0 ～ 2.7	〃
	バ　イ		6	3.0 ～ 6.3	〃
	ツメタガイ		15	1.0 ～ 2.5	〃
綱	アカニシ		29	3.6 ～ 7.3	大型のもの
	アラムシロ		7	1.0 ～ 2.0	
	小　　計		289		
掘	ツノガイ		2		少ない
足					
綱	小　　計		2		
斧	アカガイ		0		
	サルボウ	103 ,　119	222	1.8 ～ 4.8	3㎝前後が多い
	ハイガイ	2 ,　8	10	1.5 ～ 4.0	少ない
	イタボガキ		3	9.5 ～10.0	やや大型
	ナミシワガイ		352	2.0 ～ 7.5	やや小型のもの多し
	マ ガ キ		112	2.5 ～ 5.5	〃
	オキシジミ	315 ,　352	667	2.7 ～ 5.3	中型のもの多し
	ヤマトシジミ	1	1	2.5 ～	極少量
	ハマグリ	3,243 ,　2,876	6,119	1.5 ～ 6.2	1.5㎝が多量
足	カガミガイ	210 ,　203	418	3.5 ～ 5.1	ほぼ平均的
	ア サ リ	2,926 ,　3,156	6,082	1.6 ～ 4.0	1.6㎝が90％
	バカガイ	5 ,　5	10	5.0 ～ 1.0	やや大き目
	フジナミガイ		0		
	シオフキガイ	80 ,　65	145	1.1 ～ 4.4	3㎝前後主
綱	ミルクイガイ	2	2	1.5 ～ 2.0	極少量
	ムラサキガイ		0		
	ヒメシラトリガイ	12 ,　8	20		少ない
	マテガイ		10		細片化している
	小　　計		14,173		
	総　合　計		14,464		

2　区

	種　　名	左　・　右	個体総数	殻　長	そ　の　他
腹	ダンベイキサゴ		5	1.5 ～ 2.7	少ない
	イボキサゴ		17	0.9 ～ 2.3	やや小型
	カワニナ		4	1.5 ～ 2.5	やや大型
	フトヘナトリガイ		20	1.5 ～ 2.0	〃
	ヘナタリガイ		30	1.5 ～ 2.3	〃
	カワアイイガイ		212		〃
	イボウミニナ		57	1.5 ～ 2.0	〃
足	ウミニナ		426	1.2 ～ 2.1	やや多い
	ホソウミニナ		387	1.0 ～ 2.0	〃
	ウミニナ		50		?
	バ　イ		5		?
	ツメタガイ		4	2.0 ～ 2.5	少ない
綱	アカニシ		30	3.1 ～ 7.5	少量
	アラムシロ		14	0.5 ～ 0.9	少量
	小　　計		1,261		
掘	ツノガイ		1		1部欠失
足					
綱	小　　計		1		
斧	アカガイ	1	1	7.0 ～	右のみ
	サルボウ	172 , 165	337	1.4 ～ 5.8	2～3㎝が主
	ハイガイ		0		
	イタボガキ		0		
足	ナミシワガイ		877	2.5 ～ 5.0	小型が多い
	マ ガ キ		202	2.7 ～ 5.2	やや小型
	オキシジミ	738 , 852	1,590	2.1 ～ 4.4	大型のものが多い
	ヤマトシジミ		0		
	ハマグリ	6,263 , 4,165	10,428	1.8 ～ 7.5	やや大型のものが主
	カガミガイ	118 , 183	366	2.4 ～ 5.3	ほぼ平均化している
	ア サ リ	3,610 , 3,106	6,716	0.6 ～ 2.1	1.2㎝前後が主
	バカガイ	1	1	5.0 ～	
	フジナミガイ	17 , 8	15		いずれも破片
	シオフキガイ	166 , 220	386	1.8 ～ 4.3	26㎝が多い
綱	ミルクイガイ		0		
	ムラサキガイ	9 , 9	18		いずれも破片
	ヒメシラトリガイ	15 , 18	33	2.0 ～ 3.2	少量である
	マテガイ		7		破片のみ
	小　　計		20,977		
	総　合　計		22,239		

3　区

	種　　名	左　・　右	個体総数	殻　　長	そ　の　他
腹足綱	ダンベイキサゴ		5	2.0 ～ 2.5	少ない
	イボキサゴ		71	1.5 ～ 2.0	やや多い
	カワニナ		0		
	フトヘナトリガイ		597	1.0 ～ 2.5	やや多い
	ヘナタリガイ		0		
	カワアイイガイ		253	1.5 ～ 2.7	やや少ない
	イボウミニナ		19	1.0 ～ 2.2	少量
	ウミニナ		507	0.8 ～ 2.5	やや多量
	ホソウミニナ		326	0.5 ～ 2.2	〃
	ウミニナ		410	0.5 ～ 2.2	〃
	バ　イ		1		
	ツメタガイ		0		
	アカニシ		359	3.2 ～10.6	7㎝前後が多い
	アラムシロ		53	1.5 ～ 1.8	やや多い
	小　　計		2,601		
掘足綱	ツノガイ		1		
	小　　計		1		
斧足綱	アカガイ		0		
	サルボウ	570,　561	1,132	1.7 ～ 5.5	3.5㎝前後が主
	ハイガイ		10	2.5 ～ 3.5	少量
	イタボガキ		14	8.0 ～14.0	やや多量
	ナミシワガイ		7,247	2.0 ～ 7.5	小型で少量
	マ ガ キ		845	1.8 ～ 6.5	やや多い
	オキシジミ	1,563,　1,630	3,203	2.0 ～ 5.4	3㎝
	ヤマトシジミ		1		
	ハマグリ	11,548, 12,320	23,868	1.4 ～ 5.2	3㎝前後が主
	カガミガイ	444,　397	841	3.0 ～ 5.3	やや多量
	ア サ リ	6,741, 10,158	16,899	2.2 ～ 5.0	3㎝前後が多量
	バカガイ		0		
	フジナミガイ		0		
	シオフキガイ	708,　778	1,485	1.0 ～ 4.6	3㎝
	ミルクイガイ		0		
	ムラサキガイ		0		
	ヒメシラトリガイ		0		
	マテガイ		1		
	小　　計		55,546		
	総　合　計		58,149		

B 区

	種　　名	左 ・ 右	個体総数	殻　長	そ の 他
腹足綱	ダンベイキサゴ		0		
	イボキサゴ		109	1.1 ～ 2.7	やや多量
	カワニナ		0		
	フトヘナトリガイ		935	2.0 ～ 3.5	やや多量
	ヘナタリガイ		0		
	カワアイイガイ		553	1.0 ～ 2.3	やや多量
	イボウミニナ		54	1.2 ～ 2.5	少量
	ウミニナ		113	1.0 ～ 2.0	
	ホソウミニナ				
	ウミニナ		1,100	1.5 ～ 2.5	やや多量
	バ イ		17	3.2 ～ 5.2	〃
	ツメタガイ		9	2.0 ～ 3.7	少量のみ
	アカニシ		359	3.2 ～ 10.6	やや少量
	アラムシロ		134	1.1 ～ 1.5	〃
	イボニシ		64	2.0 ～ 3.2	少量
	小　計		3,447		
掘足綱	ツノガイ		0		
	小　計		0		
斧足綱	アカガイ		0		
	サルボウ	337, 358	695	1.3 ～ 5.0	少量
	ハイガイ	20, 11	31	2.5 ～ 4.0	やや多い
	イタボガキ		30	4.0 ～ 12.0	〃
	ナミシワガイ			2.0 ～ 6.1	〃
	マ ガ キ		635	3.5 ～ 3.5	小型
	オキシジミ	875, 787	1,664	2.0 ～ 5.4	やや多量
	ヤマトシジミ		0		
	ハマグリ	7,869, 10,535	18,404	1.5 ～ 6.0	1.5 ～ 2 5が多量
	カガミガイ	382, 433	749	1.5 ～ 4.5	やや多い
	ア サ リ	17,505, 18,597	36,102	1.0 ～ 4.0	多量
	バカガイ	20, 11	31	2.5 ～ 4.0	少量
	フジナミガイ		0		
	シオフキガイ	178, 226	404	1.6 ～ 2.8	少量
	ミルクイガイ		0		
	ムラサキガイ		0		
	ヒメシラトリガイ	19, 32	41	1.2 ～ 2.2	少量
	マテガイ		0		
	小　計		58,786		
	総　合　計		62,233		

脊椎動物の遺体

本遺跡からは魚類，両性類，爬虫類，哺乳類の遺体は極めて少量であった。

○　魚　類

1区では鯛の歯1点のみで有る。

3区からは鯛の歯2，エイ椎骨4，不明ウロコ2，不明獣骨3（小破片）。

B区からはタイ脊椎1，スズキ脊椎1，サメ脊椎1が見られた。

総じて遺体は少なく，遺存状態が不良で遺存率が少ないとも思われるが時代的に少ないのかも知れない。

○　両性類，爬虫類，鳥類

本類では出土遺体は確認出来なかった。鳥類の左烏口骨が1点出土している。

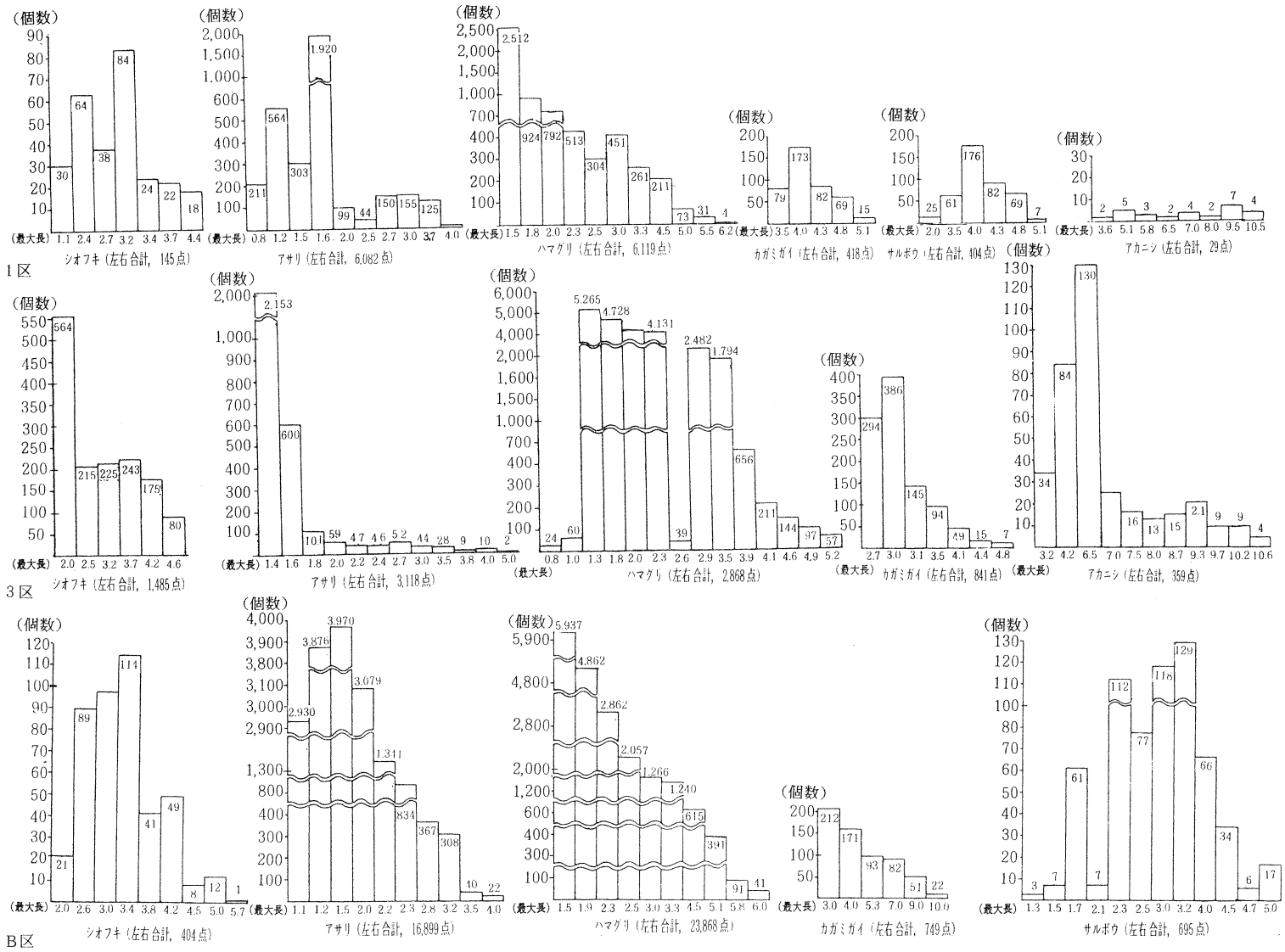
○　哺 乳 類

本類では1区，B区からシカの骨片が5片ほど検出されたのみで有る。

骨類の遺存は総数20片と非常に少ない。貝層の薄さと欠失し僅かに下層部の一部しか遺存していなかった事と推察される。また小骨類は消滅した可能性が有る。

その他貝層の中で貝の採集に努め為土器は一部しか図面上には落としていない。（土砂採取の為の危険，現場の斜面の安全性，B区。崖の上の作業，三方とも。）写真図版参照。

そのため若干の土器が貝分類の段階で検出された。（第22，23図）前述の土器と差程の差はない。1は胎土に繊維を含む。2はヘラの押し引き，3は小突起をもつ土器で半裁竹管の押し引き。4は口唇部に米粒状の刻み目を施す。6，10，11も同様な棒状工具の施文が見られる。いずれも半裁竹管による押し引き，アナダラ属の波状貝殻紋をもつ。石器は，かなり大型の粗製の打製石器で有る。（第23図）14も胎土に繊維を多量に含む深鉢型土器。15から半裁竹管や竹管の押し引きによる文様構成で有る。24は粗製の口縁部に穿孔をもつ土器で有る。（2区）26からもほぼ同様の爪形押し引き半裁竹管による半円状文様構成，押し引き爪形紋，棒状刺突をもつもの，竹管紋。ハマグリによる波状紋。口縁部はすべて平坦で尖るものはない。36は口縁部に穿孔をもつ。



第20図　主な貝遺体数量図

3. 貝 製 品　（第21図，第22図）

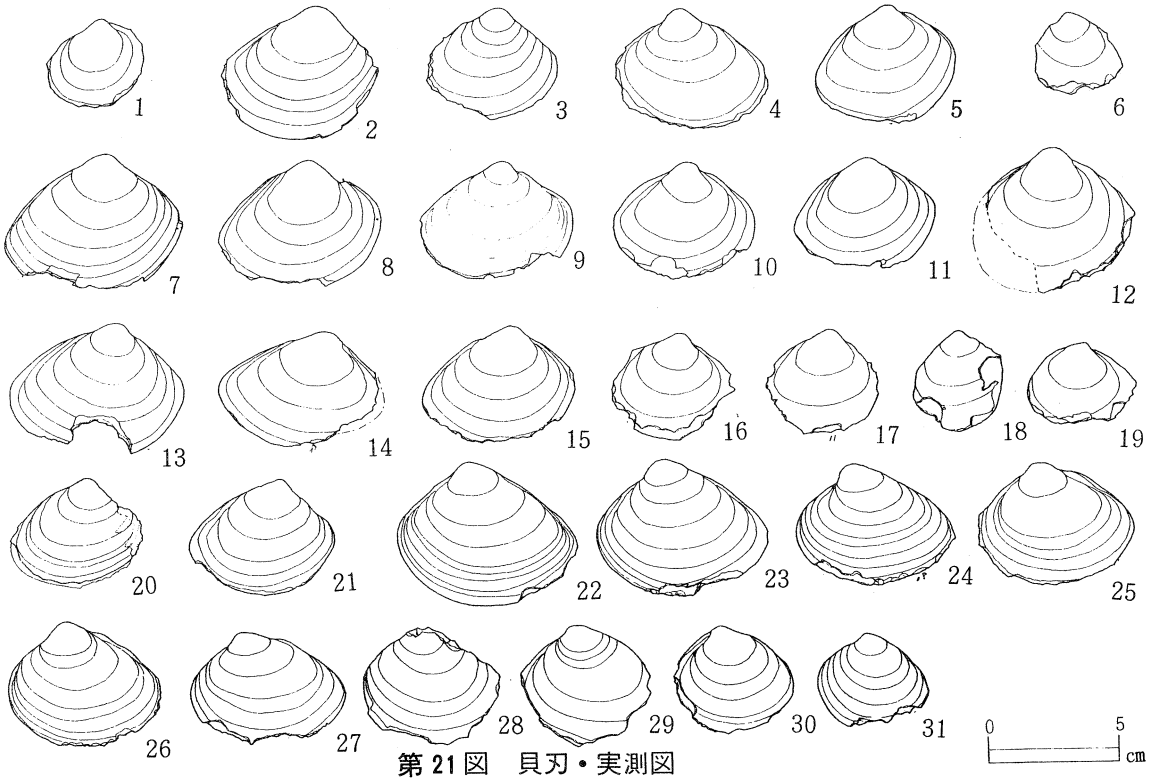
本貝塚では，貝刃のみで総数31点が出土し，その他の貝製品は検出出来なかった。大半の23点は後から発見されたＢ地区からで，１区では１点，２区では２点，３区では３点である。貝はすべてハマグリで最大は最大長6.6㎝，殻高1.6㎝，最少は4.1㎝，殻高は1.2㎝で有り，5.5㎝前後が普通で有る。次に左右別に見ると左が21と右の倍である。これらを刃部の形態から次の３通りに大別した。

1. 貝殻の腹縁全体に刃の付けられているもの。
2. 貝殻の前縁の一部に付けられているもの。
3. 貝殻の前縁の半分前後で1.2の中間的なもの。

これらのタイプは最初にある程度の幅で剥離してから刃を付けるもので，10，15，16，20，21，24，25等で，これらは３タイプの刃部をもつものが多い。

次に腹縁全体に刃を付けるものは，１，２，３，４，６，９，16，17，18，19，20，26，28，29，30が見られる。これらはかなり使用されている痕跡が見られる。16の様に両者にまたがるタイプが見られる。

その他腹縁の一部に刃を付ける５，７，８，11，13，21，22，23，27のタイプが見られる。その他これらの中に判別出来かねる12，14タイプがある。

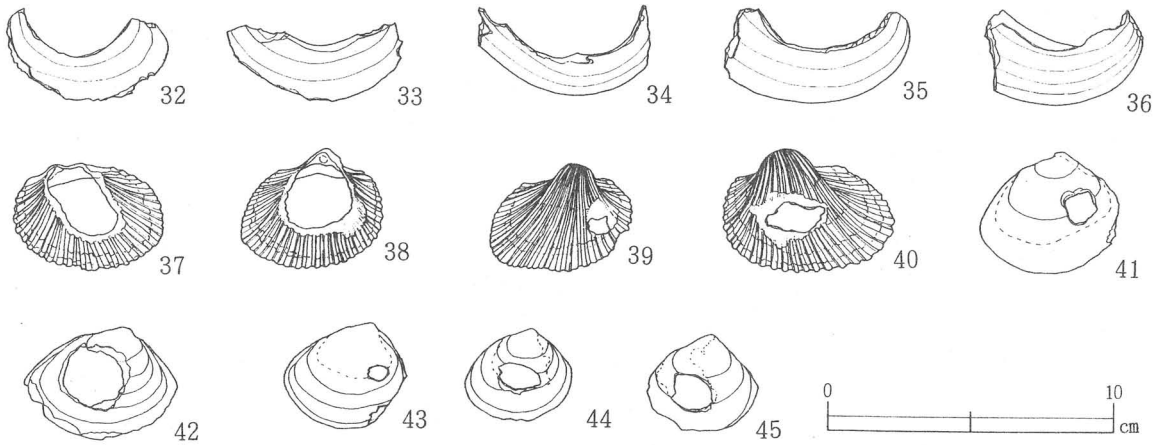


第21図　貝刃・実測図

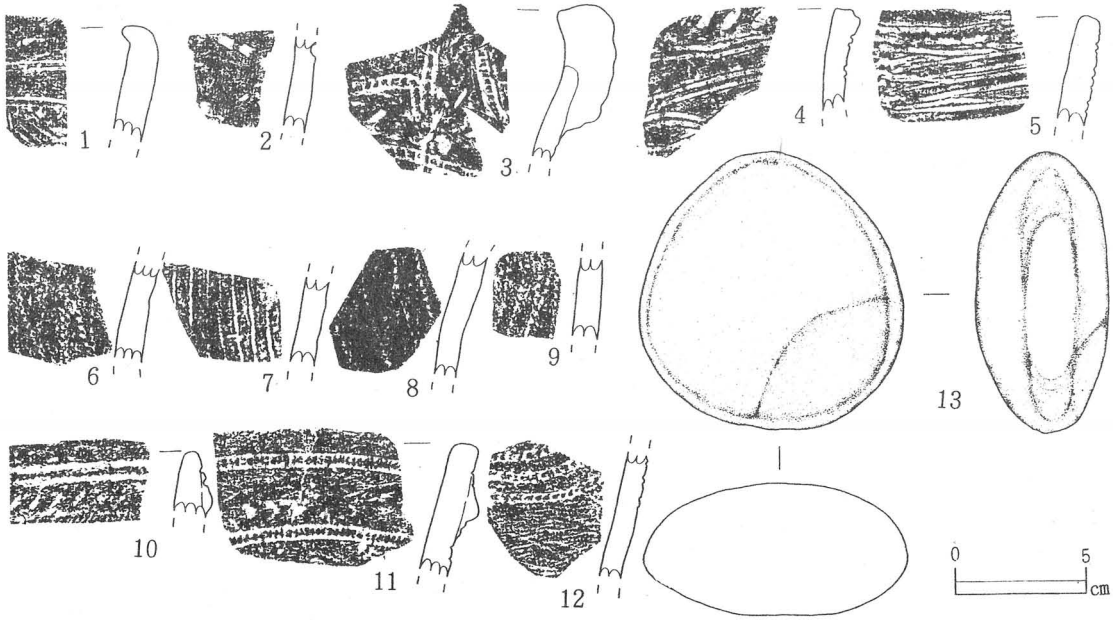
他の貝塚の例を見ると左殻45，右殻29茨城県麻生町於下貝塚，江戸崎町福田貝塚では右殻が46点，左殻21点と本貝塚や於下貝塚戸は正反対の事例もみられる。

貝刃の利用方法については肉の切断，魚の鱗かき，その他各種の道具の制作に使用され，貝刃が身近にあり簡単に手に入り，適当な厚みをもつ為比較的安易に用いられたと推察される。

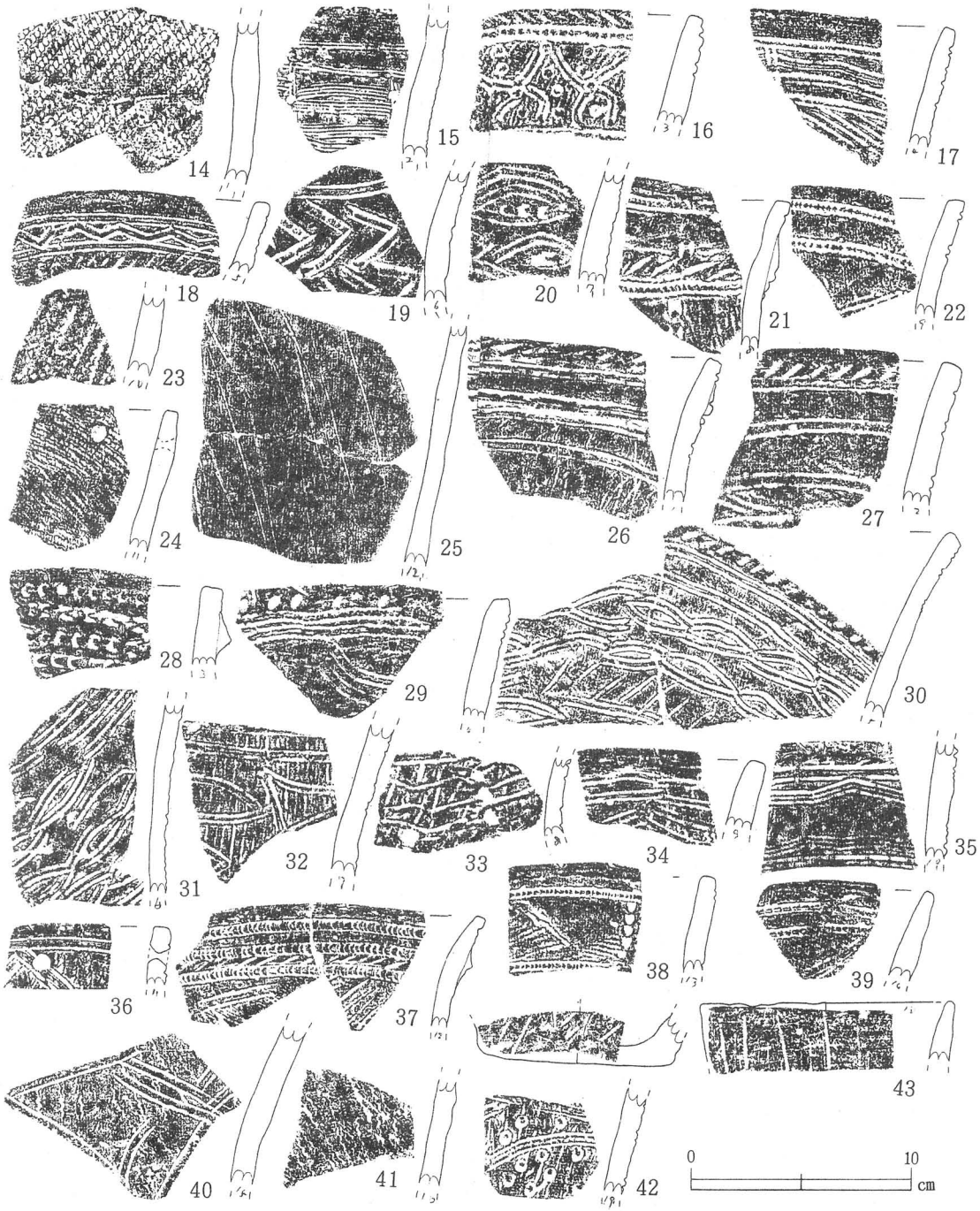
ハマグリの貝輪の破損品，サルボウの未製品等が見られた。第22図の35,36は未製品とは断定出来ない。その他ハマグリの穿孔品が見られた。これらは貝輪の未製品なのか断定はしかねた。以上が主な貝製品で有る。



第22図　貝刃・貝輪（破損・未製品）実測図



第23図　1区出土土器・石器



第24図　2区・3区・出土土器

Ⅶ 総　　括

本遺跡は貝の発見からの調査で住居跡はすべて古墳時代の遺構で遺物から時期を特定すれば古墳時代後半初頭，鬼高期から平安時代半ば迄に推移している。

1号住居跡は，やや古い時期の遺構で竈は検出出来なかった。（全掘出来ないため）遺物は少なく金メッキの耳輪，滑石製の石製品等大型で出土遺物の特異性のある遺構で和泉期末の遺構。

2号住居跡は，ほぼ2軒がダブル遺構で新しい遺構2号住居跡はほぼ墨書をもつ杯が出土している。竈は東側に位置し半円状にもつ。遺物からは平安時代前半末が推察される。

2′号住居跡は，この下に竈を北側にもち床をかなりケズられて遺存していた。竈の袖の一部と火床部が遺存していた。ここに須恵器の甑が検出され底部にコンロ状の6孔をもつ。横位に叩き目。遺物からは平安時代前半で，ほぼ連続して営まれたと推察される。

3号住居跡は，かなり大型の遺構で炭化物が散在していた。遺物は，多量の土製丸玉が出土している。かなり漁労に生活を賭けていたと推察される。坏，小型広頸壷，土製支脚から本遺構は鬼高期前半の遺構と推察される。軽石，石匙等が出土している。

4号住居跡は，坏底部は回転糸きりで付け高台の土器が見られる。ロクロ水挽き。体部はナデ調整で奈良時代末真間期末か平安時代初頭の時期。

本時代の遺構は前述の時代で覆土からはかなりの縄文式土器が出土している。しかし遺構は一ケ所も検出されず後述の貝塚の遺構は皆無である。

貝塚は，南側と東側から検出され，南側は大部分欠失し底面近くが辛うじて残存した。（本土砂採取申請時の事務所の対応が不適切で合った事が明白で有る。）

そうした事情で貝塚主体の調査と考え，調査にはいったが前述の住居跡が検出され，更に東側から新たな貝塚が表土除去工事（土砂採取に先行）によって発見され，小貝塚を調査した。本貝塚の主体をなす時期は縄文前期後半浮島式1～2の時期で僅かに前後の時期の遺物が散見される。貝層を把握出来る遺存状態ではなく貝の採取的な調査と成った。

貝種は，前述のとうり腹足綱15種，掘足綱1種，斧足綱17種が同定された。数量的にはハマグリが圧倒的に多く，次にアサリ，ナミシワガイ，オキシジミ，シオフキガイ，マガキ，サルボウ，カガミガイが続き，ウミニナ類がこれに続く。これらの貝の遺体から本時期の自然環境を復元すれば半ば内湾的で砂質，砂泥質とやや沿岸域の岩礁，砂泥質，砂質的環境が当時の自然環境と推察される。城下川に解析された部分が内湾的で麻生の町並みは沿岸的環境が推察される。これが貝塚の形成された縄文時代前期後半の自然環境と推察する。周辺の調査された於下貝塚，整理途中の大門C貝塚，道城平貝塚，玉造町井ノ上貝塚とは貝種等に差が見られる。これは時代の差と捉えるべきか今後の課題である。浮島貝ケ窪貝塚は浮島式の命名された貝塚で貝種，割合等に差

程の違いはない。

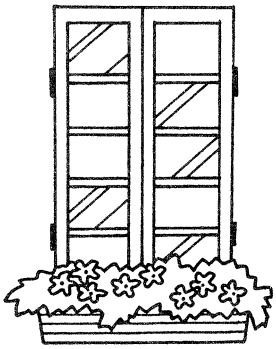
本貝塚では貝製品は少なく，骨角器，脊椎動物，哺乳類，鳥類も皆無に近く石器も同様であった。本遺跡の大半は調査前に大半が欠失し伴う遺構も検出されなかった事と浮島式の１，２式と言う極一時期の貝塚なのか問題を残した貝塚であろう。

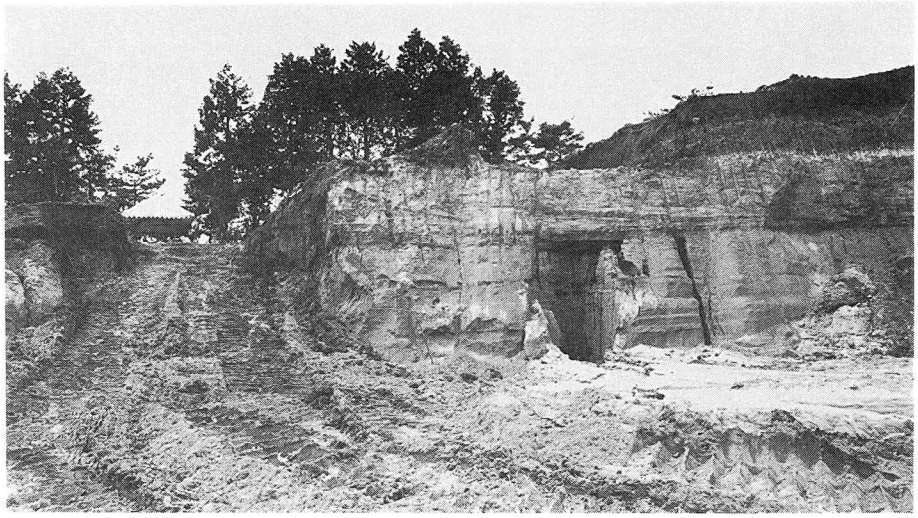
文責　汀　安衛

参考文献

學実研究	第15号	早稲田大学教育学部	西村正衛	1966
茨城県史研究	第37号	茨城における貝塚研究の現状	川崎純徳	1980
霞ケ浦の貝塚文化			茨城県立歴史館	1987
於下貝塚発掘調査報告書			麻生町教育委員会	1992
上高津貝塚地点	史跡整備事業に伴う発掘調査報告書		土浦市教育委員会	1994
茨城県霞ケ浦周辺の貝塚の研究			茨城県立歴史館	1985
※道城平遺跡貝塚		（現在整理作業中）	麻生町麻生道城平遺跡	1996
※大門Ｃ貝塚		（　〃　）	〃	1995
※井ノ上貝塚		（　〃　）	玉造町教育委員会	1997

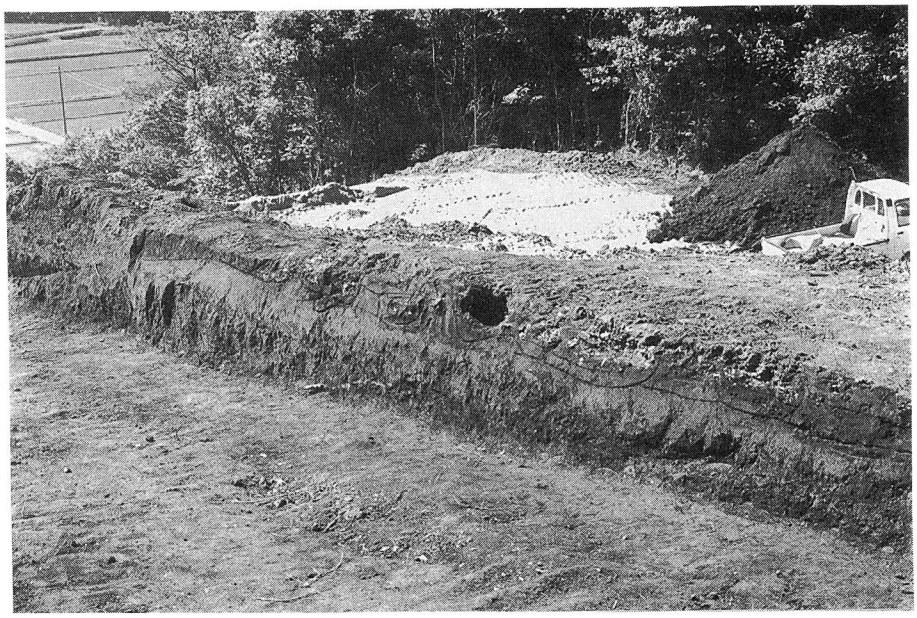
※印は現在 汀 安衛が主体となって整理作業中。（H 10年7月）



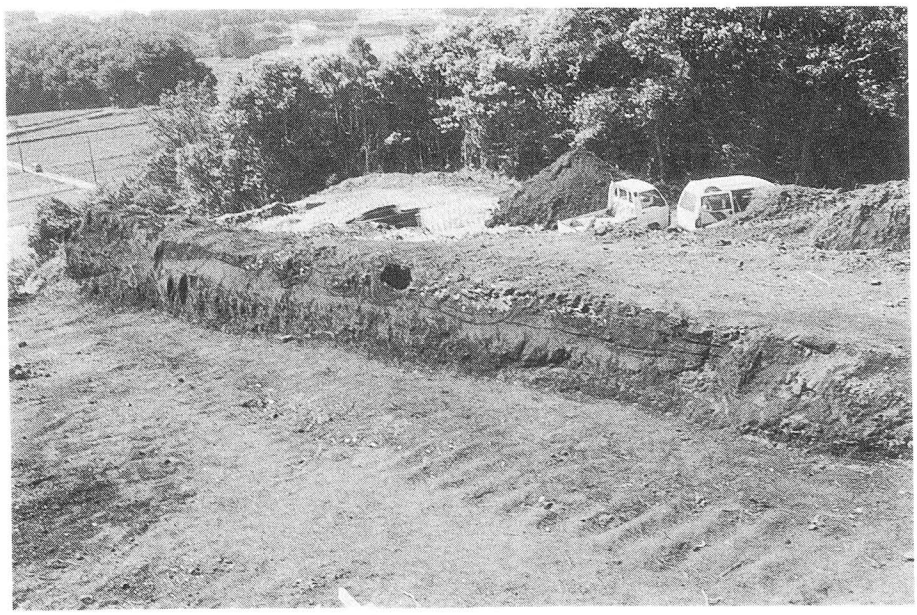


ＰＬ－１　遺跡発見時の状態（上、中、下）

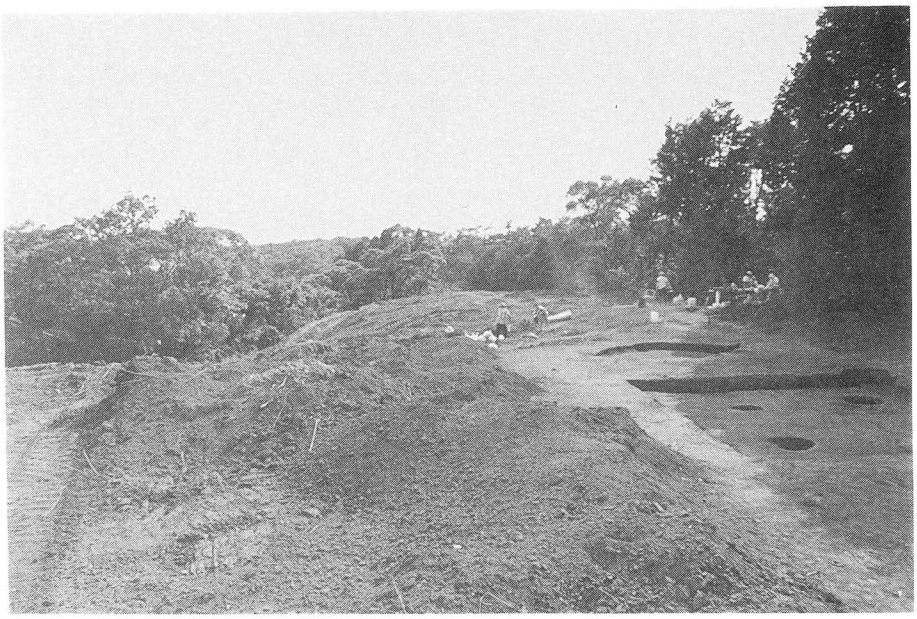
ＰＬ－２　１～３区までの貝残存部（上、下）



ＰＬ－３　１～３区の貝露出状態（上、下）



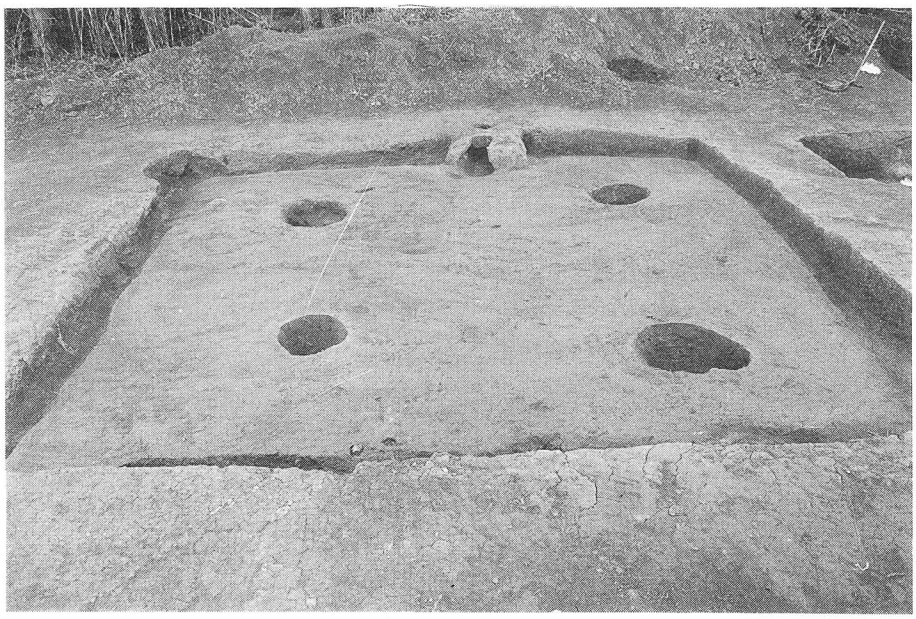
ＰＬ－４　貝塚の位置（上）、貝層断面（下）



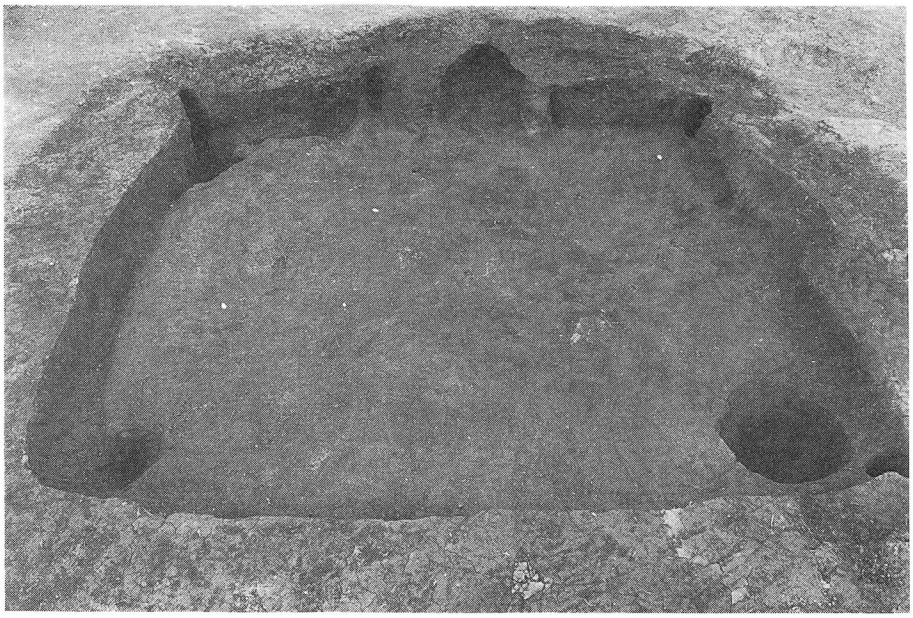
ＰＬ－５　１～４号住遺物全量（上、下）

ＰＬ－10　１号住遺物出土状態（上）、同完掘（下）

ＰＬ－９　２号住遺物出土状態（上）、２号完掘（下）



ＰＬ－８　３号住遺物出土状態（上）、同完掘（下）



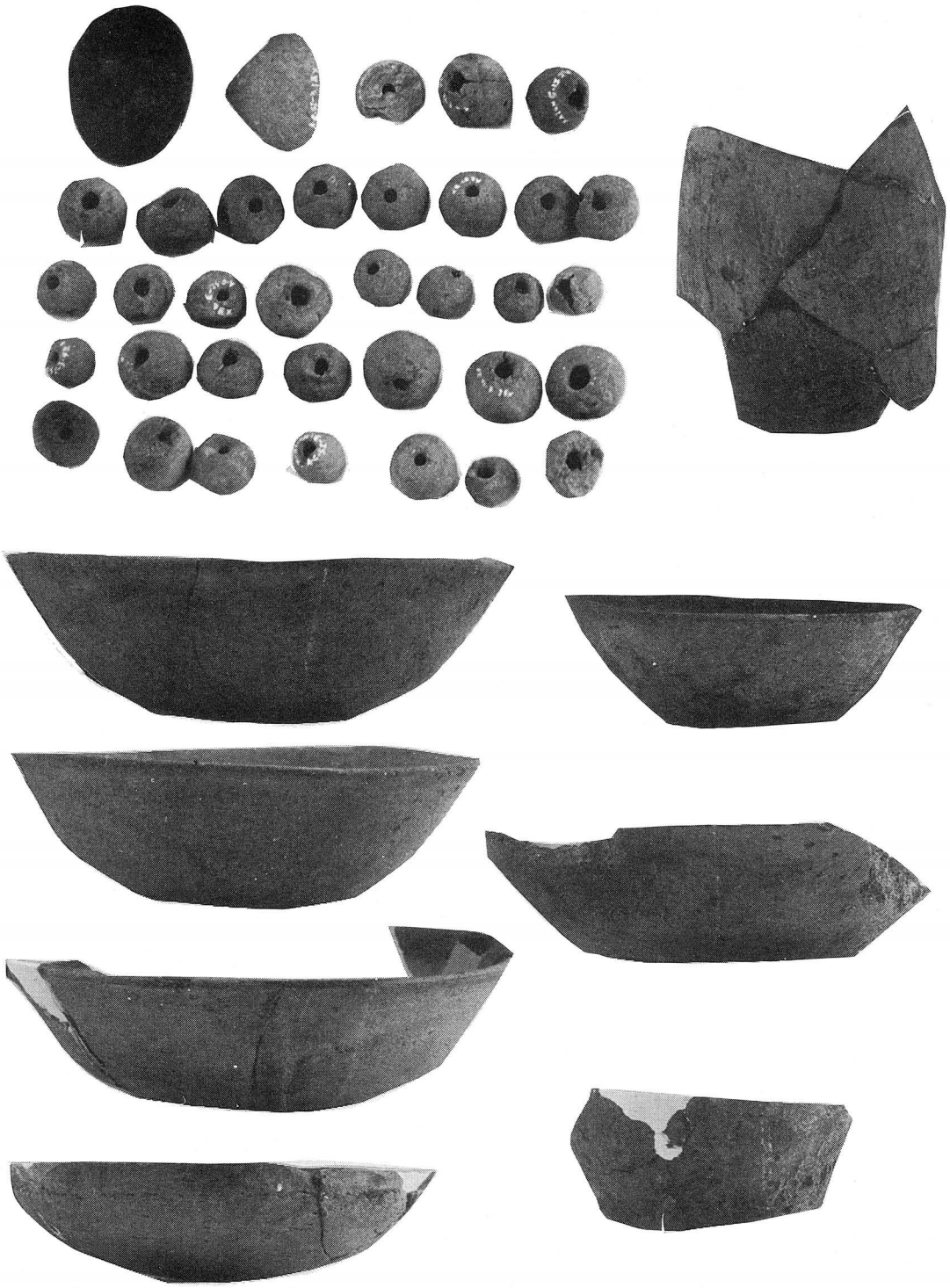
ＰＬ－７　４号住竈と出土遺物状態（上、下）

ＰＬ－６　４号住完掘（上）、同竈（下）

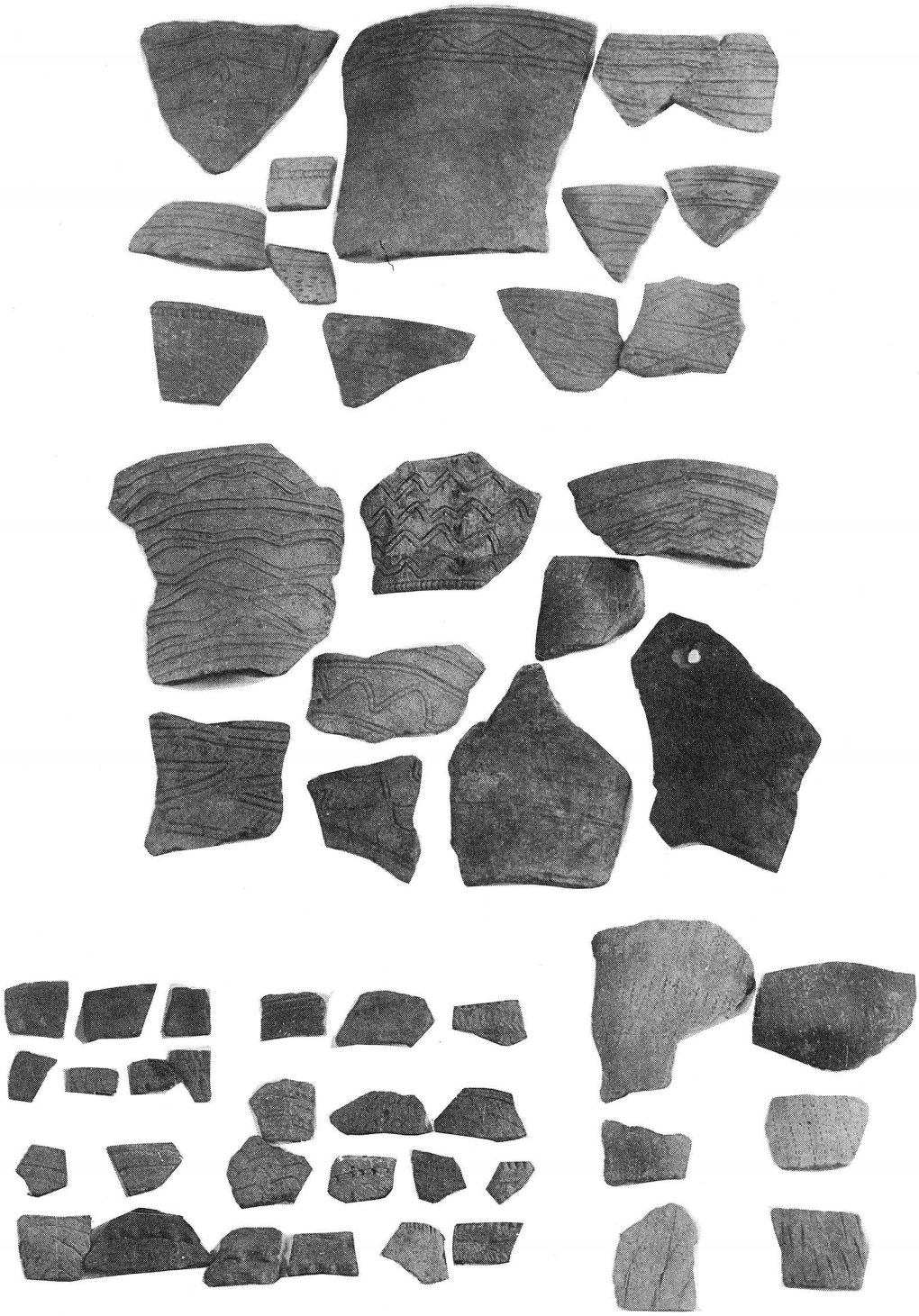
ＰＬ－11　Ｂ区貝層（上）、同完掘、北側から（下）

ＰＬ－12　Ｂ区完掘、下側から（上）、同上から（下）

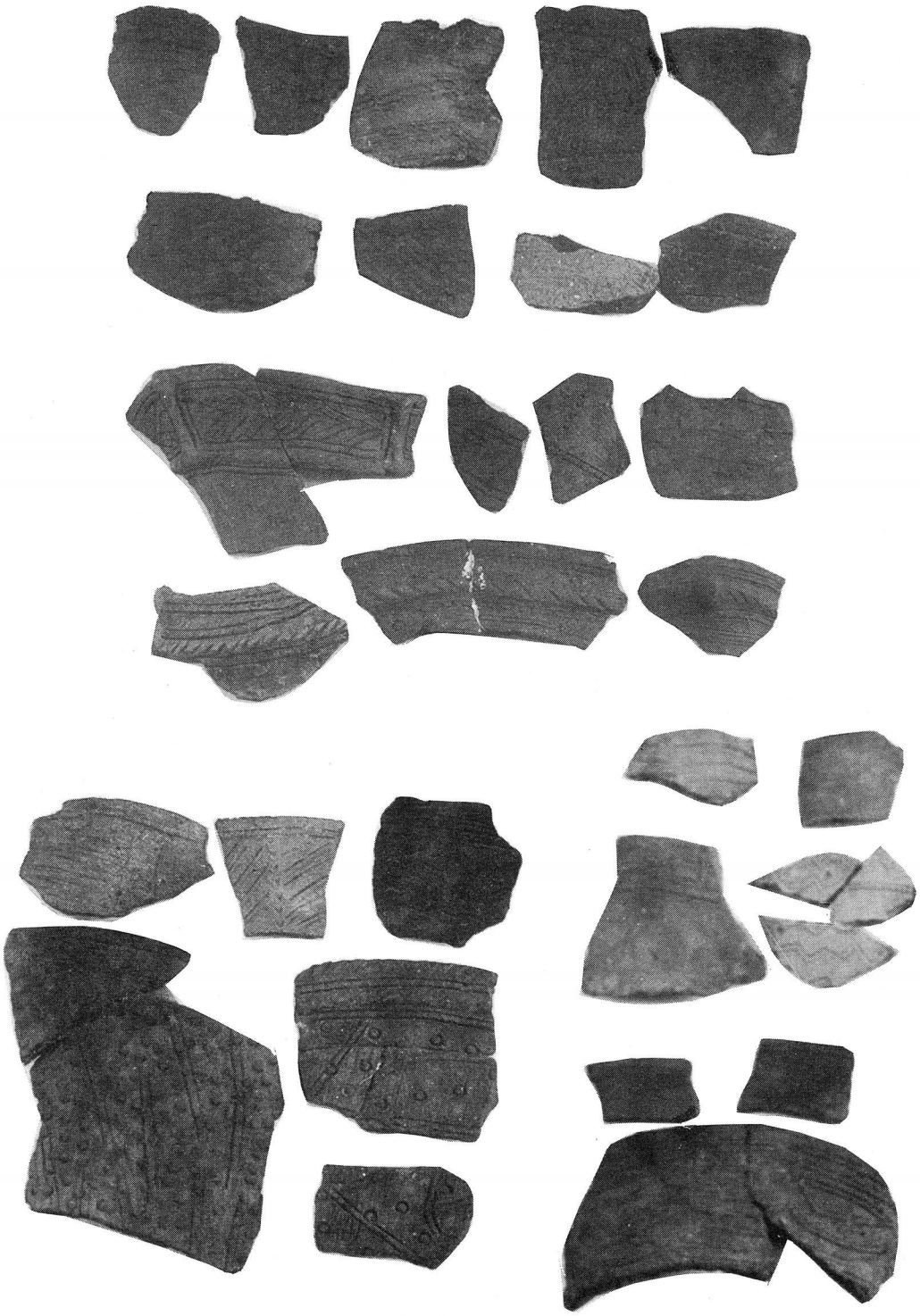
ＰＬ－13　１号、２号、３号住居跡出土、遺物



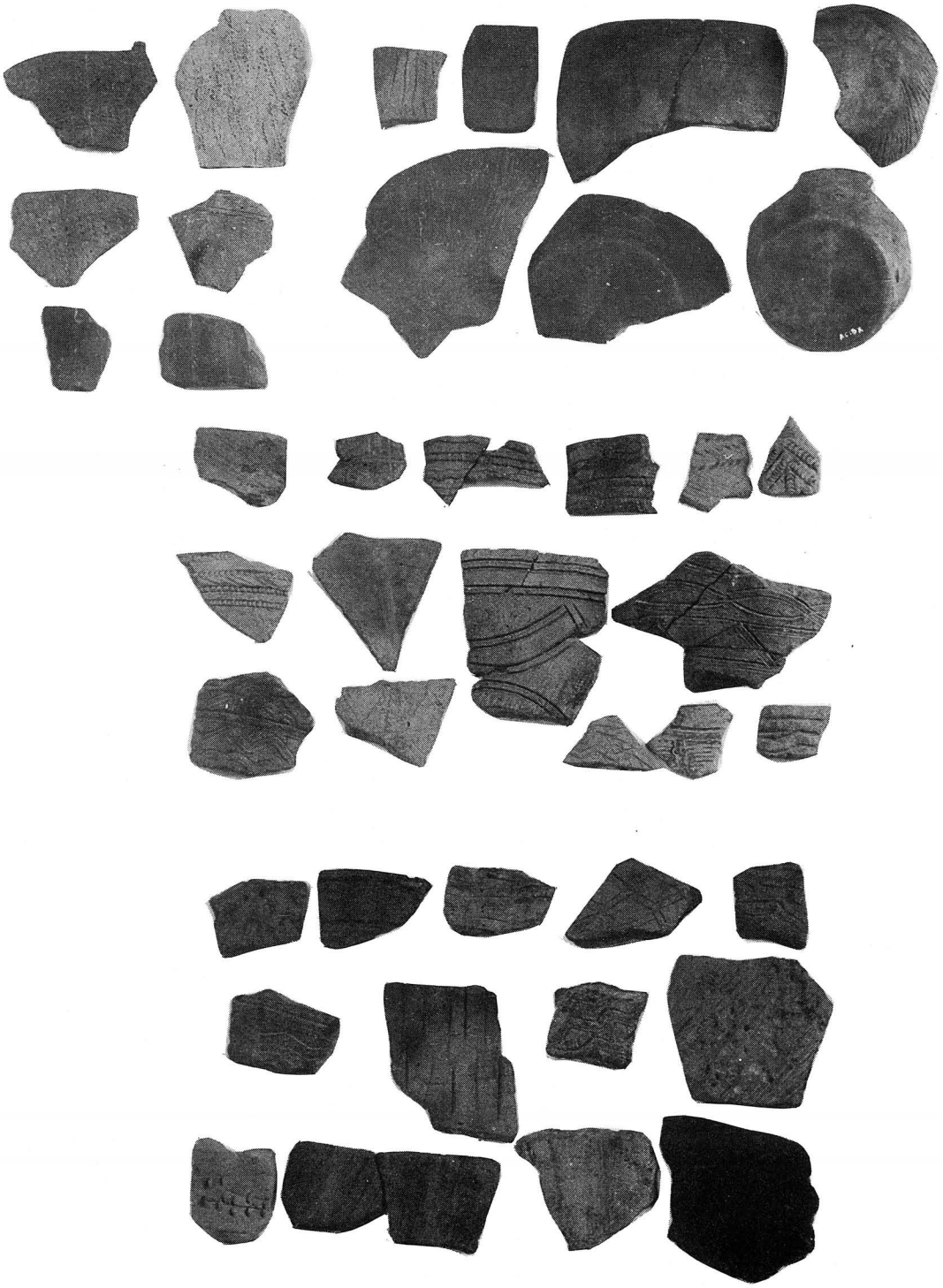
ＰＬ－14　４号住居跡出土、遺物



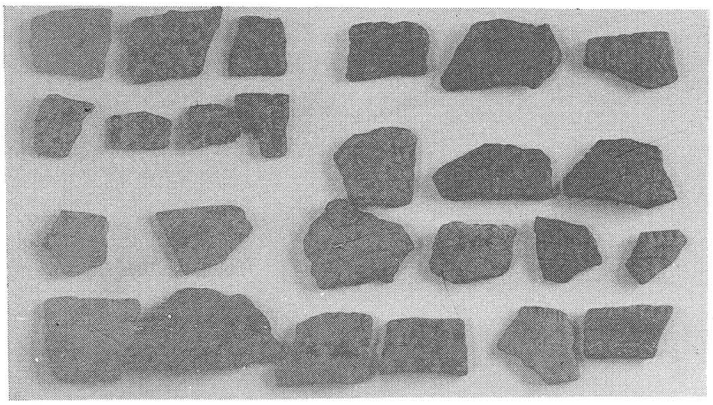
ＰＬ－15　Ｂ地区出土、土器（上、中、下）

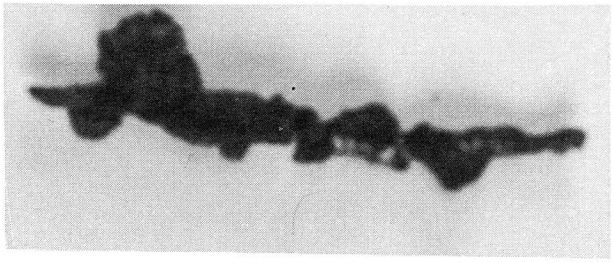


ＰＬ－16　Ｂ地区出土、土器

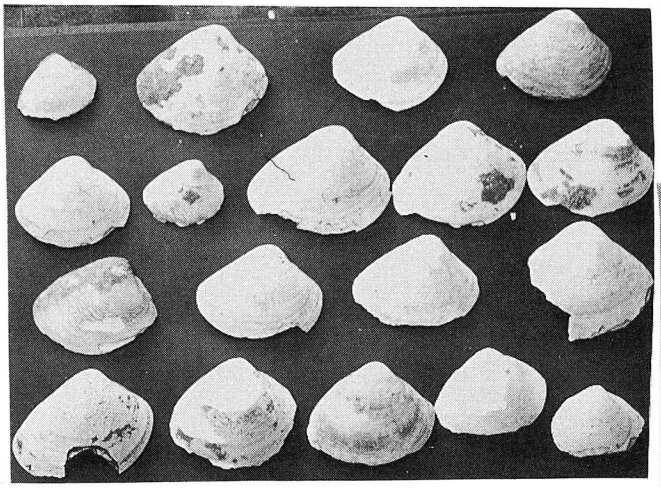


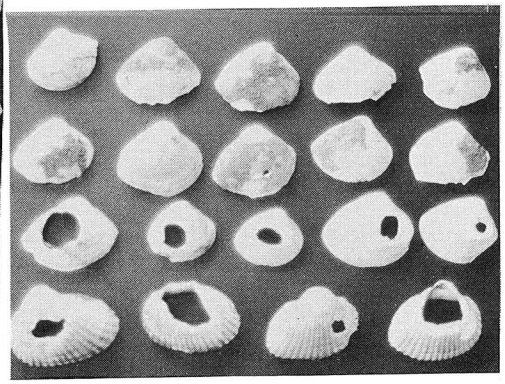
ＰＬ－17　住居跡出土、土器



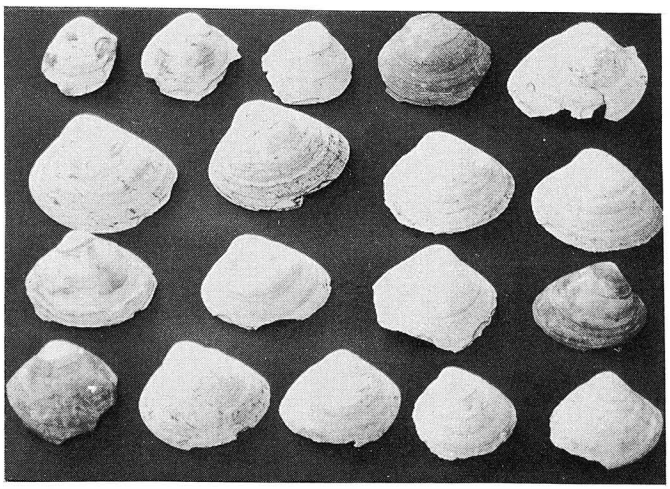


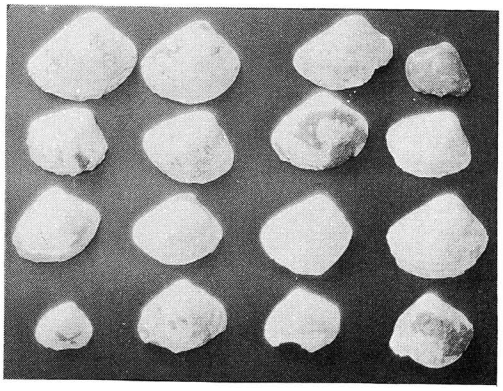
ＰＬ－18　住居跡出土、土器、鉄器



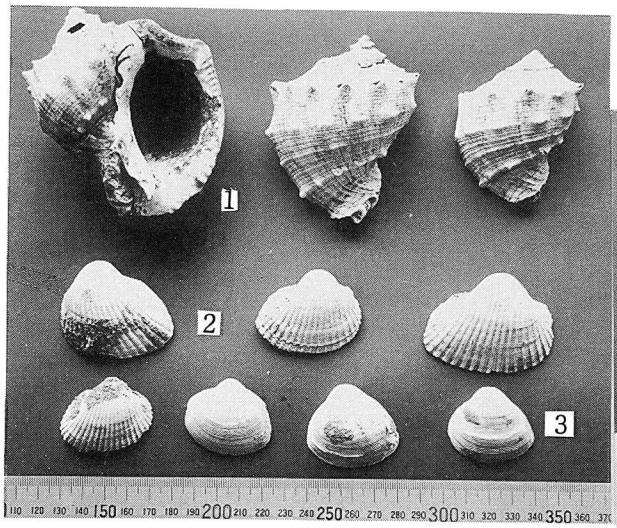


究孔をもつ
サルボウとハマグリ

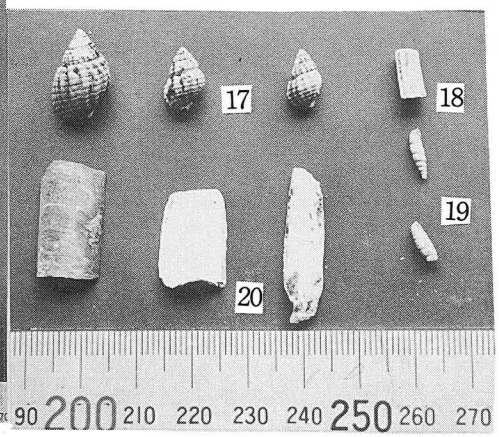


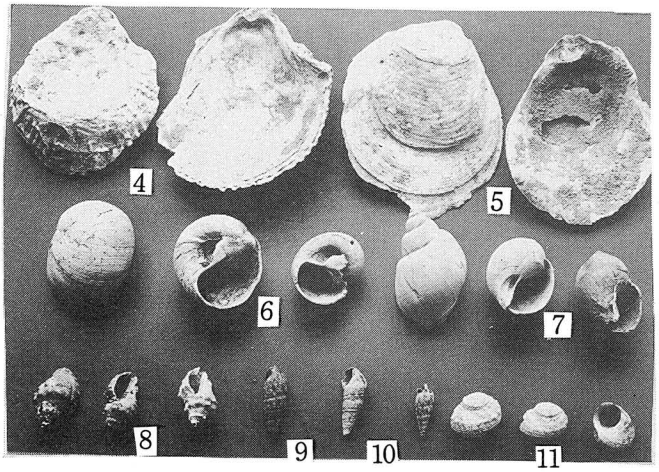


ＰＬ－19　各区出土貝刃、貝輪、未成品



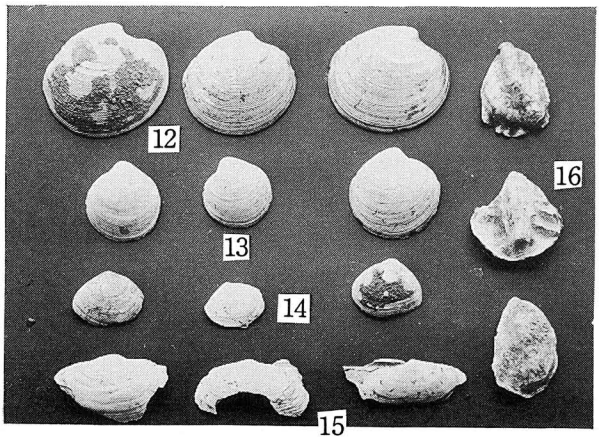
17.アラムシロ　18.ツノガイ
19.キセルガイ　20.マテガイ



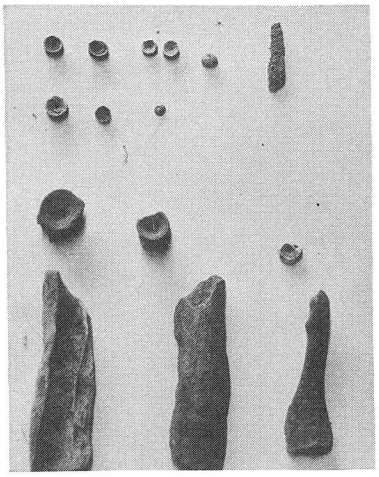


1.アカニシ　2.サルボウ
3.イタボガキ　4.イタボガキ
5.イタボガキ　6.ツメタガイ
7.エッチョウベイ　8.イボニナ
9.ウミニナ　10.ホソウミニナ
11.イボキサゴ　12.カガミガイ

13.オキシジミ　14.ヒメシラトリガイ



15.ムラサキガイ
16.マガキ



タイ　エイ　イノシシ
鳥鶏骨

PL—20

四部切遺跡
発掘調査報告書

1997年12月

編集　鹿行文化研究所

発行　麻生町教育委員会

印刷　久保田印刷
麻生町四鹿963−20